

高橋良雄さんの

及位の昔話(五)

編 山形民話の会・武田 正

高橋良雄さんの

及位の昔話 (五)

編

山形民話の会
武田正

高橋良雄さんの 及位の昔話（五）

9	8	7	6	5	4	3	2	1
どうもこうも	なら梨ぬぎ	長者むかし	こぶとり爺さま	舌切り雀	かちかち山	花咲が爺じい	花咲か爺じい	花咲か爺じい

八一	七〇	六四	五七	四九	三八	二六	一七	五
----	----	----	----	----	----	----	----	---

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
主寝坂縁起	名刀蛇切丸由来	昔話の諺	なんげあえ話	胡瓜姫こ	胡瓜姫こ	古屋のもり	化げ猫の恩返し	姥捨山	木のまった	和尚と小僧	鴨どんじよ話
(伝説)	(伝説)										

あとがき（高橋良雄）

ガリ版を終えて（武田 正）

一三八	一三三	一三二	一三一	一二三	一一六	一一二	一〇八	一〇一	九二	八七	八五
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----

一四四

高橋良雄さんの原稿によるものです。

1 花咲か爺じい

むがしあつたけど。

ある所^どさなー、爺さまど婆さまいであつたど。爺あまだなー、毎日山^{にう}さ木伐りん行てつがったど。

ある時^{つぎ}、爺さまあ、まだ山さ木伐りん行たば、山道さ犬こあ落ちつただけど。白えなで、生つでがらまだなん日もただねあよんだ、小^ちつちえ犬こただけど。爺さまあ、「あらつ、こんな所^どさ、犬こあ落ちつたおんだ。めんごえ犬こだごど」

て、ほの犬こ拾ろて来たけど。ほうして、

「婆さま婆さま、山さ犬こあ落ちつただけはげあえ、拾ろてきた。まず見ろちや」
て言^ゆたど。ほしたば、婆さまあ、

「どれどれ」て出て来て、

「あらや、めんごえ犬こだごど」
て見ただけど。ほして、

「えぐ拾ろてきてくつだごど。俺^{あら}だわらしたづあいねはげあえ、この犬こ育でんべな爺さま」

ていうけど。ほしたば爺さまあ、

「んだな婆さま」

て、二人あ大事^{したりであえじ}んして育でっただけど。

犬こあ、だんだん大つきぐなて、爺さま山さ行げば山さ、婆さま川さ行げば川さ、どこさでも、後んなり先んなりつで歩くなだけど。んだおんだはげあえ、爺さまも婆さまもめんごがて、自分^{おわ}わらすみであん大事^えんしていんなだけど。

ほうしたば、ある時、家の裏^えの方で、犬こあ、わんわんて鳴ぐ音あすつずおん。ほうすつど婆さまあ、

「爺さま爺さま。犬こあめつぽう鳴ぐおんだ。あの鳴ぎ声あただ事んねあよだぜあえ。まず早く行てみろちや」

ていうおんだはげあえ、爺さまあ、なんだべど思^もて、あたふたど裏さ行てみだど。ほうしたば、犬こあ、わんわんて鳴ぎながら、前足^{めあえ}で土掘^{つつ}てあ、後足^{あじ}でけつ

とぼし、土さ穴掘ったけど。ほうして、爺さま行たば、爺さまもん(はかま)へくわえで引張っけど。ほんで爺さま、

「なんだや白。ほご掘れてが」

て言たば、犬こあ、まだわんわんて、爺さまあはがまさ前足かげで、爺さまどご見ながら鳴ぐけど。ほんで爺さまあ、

「よしよし、わがたわがた。までまで」

ていうど、家さ行て鋤持てきて、ほご掘てみだど。ほうしたば、ほごさ大分大つき瓶こあ埋んまったけど。

爺さまあ、

「なえだや。瓶こなの出はてきたおんだ」

て、ほの瓶こ引張り上げでみだど。ほしたば大判から小判から、宝物あえつぺあつまったけど。爺さま、どでして、ほれ家さ持てえて、

「婆さま、婆さま。まずまずたまげだ。まず見ろ」

て、ほの瓶こ婆さまさ見めへだば、婆さまもたまげで、

「これあなえだおんだや。どから持てきたおんだ」

て、どでしてみっただけど。爺さまあ、

「白あ、わんわんて鳴ぐけべ、んだはげ行てみだべ、ほしたば白あ、土掘ているおんだはげあえ、こご掘れてがて、ほご掘てみだなよ。ほしたば、この瓶こあ出はてきたけなよ」

て、二人あたまげでいだけどは。

ほうして、ほの瓶こあげで、金ど宝物わげで勘定かんじよしったけど。ほしたばほごさ、隣りの欲張よこり爺んじあ、

「はえつとー」

て来たけど。ほうして、爺さまど婆さまあ、大判なの小判なのちよしった（いじっている）べ。ほれ見でたまげでは、

「あらあらつ。なんだやお前家めあええであ、何時こめあんの間 ほんげあえ金持んなたおんだや。ほの金何所どから持て来たおんだや」

て、なんべんも聞ぐおんだはげあえ、人のえ爺さま、

「裏で白あ、ここ掘れてあんまり鳴ぐおんだはげあえ、ほご掘てみだば、これあ
出はてきたあだけ」

て教へだど。ほしたば、隣りの欲張り爺んじあ、

「はげあえたごどして持て来たながー。んであ、白どご俺どさも貸へ。俺も掘て
みつさげあえ」

て貸すても言わねあな、白どごむりむり連で行てしまたけどは。

ほうして、白あ嫌だていうかまわねあで、自分家の裏さ連で行て、

「白つ此処がつ、白つ此処がつ」

て、あつちこつち引張て歩て、白あながねあおんだはげあえ、首さつけつた縄、
ぐえぐえど引張たべ。すつど白あ痛であおんだおん、きやんきやんて鳴あだべ。
ほうすつど、

「此処が、此処が」ていうど、掘れても言わねどご、鍬で、であであんど掘たど。
ほうしたば、がしやがしやど瀬戸かげなのばり出はてきて、金目のものなの、
何も出はらねあけど。

ほうすつど隣りの欲張り爺んじあごしえで、

「このめくされ畜生あ、俺あどさば何にもええおの出さねあで、瀬戸かげなのばり出しあがて」

ていうど、白あどご、鋤でばえんばえんしばだぎづげで、殺してまたけどは。

んだおんだはげあえ、なんぼしたて、白あどご返えさねあべ。ほんで爺さま心配して、隣りさ、

「白あどご貰いんきた。白あどごにいだべ」

て行たば、隣りの欲張り爺んじあ、

「あんた畜生あ、あるおんでねあ、俺あどさ瀬戸かげなのはんて出しあがらねあで、あんまりごしやげっさげあえ、ぶっ殺して投げできた」

ていうけど。ほんで爺さま、

「なんだて殺したながは、むぞせあえごど」

て泣ぎながら、白あどごさがして、ていねん埋でおがだけど。ほうして、ほごさ松ぬ木植えだけど。

ほうしているうづん、ほの松ぬ木あうんと大つきぐなたけど。ほんで爺さま、
「まずまず、この松ぬ木あ大つきぐなたおんだ。こんげあえ大つきぐなたおんだ
おん、これで臼でも掘つが」

て、ほの松ぬ木で臼掘たど。

ほうして、ほの臼で米搗ぎしたど。ほしたば、つぐ度ん、大判なの小判なのえつ
へ出はてきたけど。爺さま、どでして、大つき声で、

「婆さま、婆さま。まず来て見ろ、まず来て見ろ」

て叫^さがだど。ほしたば婆さまあ、爺さまあ、あんまり大つき声で叫^さがおんださ
げあえ、何事あ起^もだど思^もて、

「なえだやは爺さま」

て言^ゆいながら表さ出はて見たど。ほうすつど爺さまあ、

「まず、これ見ろ」

て、臼^めん中見へだべ。ほうすつど婆さまたまげで、たまげで、眼丸^{まなぐ}こぐしつた
けどは。ほごさ、隣のへちやへちや婆んばあ、隣りであめつぼう大つき声出して

騒ぐおんだ、なになおんだべど思て、出はて来たけど。ほうして、

「ほんげあえ大騒ぎして、ないだや」

て、そばさ来て見で、白ん中見たべ。婆んばどでしてしまたけどは。んだべ、白ん中さ大判がら小判なの、沢山入ていたおんだおん。ほんで隣のへちやへちや婆んば、

「なしてこんげあえ金あ出はたなや」

て聞ぐけずおん。ほんで爺さま、

「この白で米搗いだら出はたなだ」

て教へだど。ほしたば、婆んばあ、ばだばだと自分家さ走して行て、

「爺い爺いっ。まず来てみろ。隣りの家であ、米搗きしたば、大判がら小判、えっへあ出はたどて、大騒ぎだけぜあえ。俺あ家でも早ぐあの白借つできて、米搗いでみろちや」

て、あがりがまちんどごで叫がぶけど。ほうすつど欲張り爺んじあ、

「んだがつ」ていうど、あしだが（足高）つつかげで、走して行て、隣りの爺さ

まださ、「ほの白貸^かへ」ていうど、貸すとも言^ゆわねあな、まだむりむり持て行てしまたけどは。

ほうして、自分の家さ持て来つど直ぐ、

「婆んばあ、米もてこえ」

て、米持てこらへで、搗ぎ始めだけど。

へ 隣りんなより ええおのあ出はれ

隣りんなより ええおのあ出はれ

て叫がびながらつっただけど。ほしたば、臼ん中で、がらからつ、びちやびちやつ。

がらからつ、びちやびちやつていうけど。欲張り爺んじあ、ほれもかまわねあで、まだ搗^つだど。ほしたば、まだ、がらからつ、びちやびちやつていうけど。ほんで爺んじあ臼の中みだば、瀬戸^{へど}かげがら、牛^{べこ}の糞^{ふん}なの、臼あえっぺあなるほど出はだけど。

ほうすつど欲張り爺んじあ、ごしえで、

「なんだ、この糞たれ臼あ」

ていうど、まさがり持てきて、どえんどえんど、ほの臼割てしまたけどは。ほうして、ほの臼みな燃やしてしまたけどは。

隣りであ、あんまり臼持て来ねおんだはげあえ、爺さまあ、臼もらいん行たど。

「まだ、つがねあんね米ああつさげあえ、臼もらいん来た」

て行たば、隣りの欲張り爺んじあ、

「あんた臼あねあおんだ。瀬戸かげがら牛の糞はんて出しあがねらねおんだおん。んだはげあえ、みな割て焚^{てあ}でしまたは」

ていうぞおん。隣りの欲張り爺んじあ、ごしえでみな燃やしてしまたていうんだし、なんずも仕方ねあくて、ほの臼燃やした灰^{あぐ}もらてきたど。

ほうして、ほの灰、犬こ埋^{んめ}つだあたりさ、ざえつとかげだど。ほしたら、ほごらあたりの枯木さ、あつていうこめあえん、みな花咲^{さあ}えだけど。爺さまどでしてしまたけど。ほんでこれだば、殿さま来^{づぎ}た時見へねあんねあ。ど思^もて、殿様来んな待ちつだど。

ほうしていうづん、ある時、殿さま来たけど。殿さま、えつぺあ家来^っ連で、

行列つくて、向うがら来っけど。ほんで爺さまあ、大つき声で、

「花咲が爺んじ、花咲がへで見へあす。花咲が爺んじ、枯木さ花咲がへで見へあす」

て、殿さまの行列さ叫がだど。ほしたば殿さま、

「なにっ。枯木さ花咲がへるて、それは面白い。んだら咲がへでみろ」

て、殿さま、行列止めで見っだど。ほうすつど、爺さまあ、

「この枯木さ、みな花咲げっ」

ていうど、枯木さ、ざえつと灰撒めあえだずおん。ほうしたば、ほごらあだりの枯木

さ、みな花咲せあえだけど。

ほんで殿さま喜ごで、扇開あえで、「見事、見事」て賞めでくつで、ごほうびえつ

ぺあくっただけど。

隣りの欲張り爺んじあ、ほの話聞ぐど、臼焚てあえた残りの灰あぐ、がえがえどかつつあ

らて、殿さま来んな待ちっだど。自分おわも枯木さ花咲がへで、ごほうび貰いであく
てだど。

ほのうづん殿さま、まだ行列つくて来たけど。すつど爺んじあ喜^こで、行列のそばさ行て、

「花咲が爺んじあ、枯木さ花咲がへで見へあす」
て、叫^{こゑ}がだど。ほしたば殿さま、行列止めで、

「よし。それでは咲がへでみろ」

て、殿さまがいうど、欲張り爺んじあ、灰すこであまつかで、

「枯木さ花咲げっ」

ていうど、ざえつと撒^めぎ、

「枯木さ花咲げっ」

ていうど、灰すこであまざえつと撒^めだべ、んだて花なのさつぱり咲がねあで、

ほの灰あ、殿さまの眼^{まなこ}さなの、家来達の眼^へばり入てしまたあだけど。

ほうすつど殿さまごしえで、

「この嘘^{うそ}こぎ爺んじあ、えぐねあ爺んじだ。捕^とえで百ただぎんすろ」

て、たあだすこであま叩^{たた}がつて、起きるもなにも出来^{でき}ねあで、泣^なぎながら、うー

うーんてうなてだけどは。

んだはげあえ、欲張たて駄目だおんだど。とんぴん からんこあ ねあつけど
は。

(話者 高橋久雄)

2 花咲か爺じい

むがしあつたけど。

むがし、ある所どさな、正直だ爺さまど、嘘ずほこき爺んじあいだけど。ある時、二人あ
川さ築やなかげだけど。ほうしたば、正直だ爺さまのやんなさ、雑魚あえつぺあかが
たども、ずほこき爺んじあやんなさ、まだ、犬こはんてかがらねけど。ほうすつ
ど嘘こき爺んじあ、面白おもへぐねあおんだはげあえ、ほの犬こ、正直だ爺さまのやな
の方さ、ぶつとばしてよごしたど。ほしたば、ほの犬こあ正直だ爺さまのやなさ

かがたけど。正直だ爺さまあ、

「これあめんごえ犬こあがつた」

て、頭撫で、うんと喜で、ほの犬こ懷しとしろさ入で、家さ連で来たど。ほうして、赤あえ魚とじこ食かへで、大事ん撫でさすて育てつだけど。

犬こあ、だんだん大つきぐなて、ええ犬こんなたけど。ある時、婆さまあ、

「爺さま爺さま、蕎麦蒔ぎしねあんねべなは」

て言ゆたど。ほんで爺さまも、

「んだな婆あさん。蕎麦蒔へつぐ節へつだおんはな。んであ、今日あだりから、そろそろ蕎麦蒔ぎでもすつが」

ていうなで、二人あ畑さ行て、爺さま畝こしえすつど、婆さま種蒔ぎしつたずおん。ほうしたば、畑の隅この方で、犬こあわんわんて吠える音あすつずおん。ほんで二人あ腰伸ばしてみだば、犬こあ、吠えであ前足めあえで土つちかつちやくてあ吠え、土かつちやくてあ吠えして、爺さまどご呼ぶけど。爺さまなえだべど思もて、犬こんどごさ行て、

「此処掘れていなが」

て、ほご掘てみだど。ほしたば、一鍬掘たばんで、ざぐんざぐんて金の音あして、他のどご別だけど。ほうして掘てみだば、金あ出はてきたけど。ほうして掘れば掘る程、宝物あえつぺあ出はてくつけど。

ほんで、爺さまど婆さまあ、うんと喜で、まず一服すつがて休んでいだけど。

ほしたば、ほごさ隣のへちやへちや婆んば来て、掘た宝物みで、たまげでしまて、

「あらあら、こんげあえ宝物なんずんして見つけだおんだや」

て聞ぐけど。ほんで婆さま、

「お前の爺さまど、俺あ家爺さま、ほれやんな掛けだべであ、ほしたば、えの爺さまなさ犬こあ掛がて、俺あ家の爺さまなさ、雑魚あ掛がたべ。んだおんだんださげあえ、えの爺さまごしえで、犬こふつとばしてよごしたば、ほの犬こあ俺あ家の爺さまやんなさ掛がたべ。ほんで俺あ家の爺さま、ほの犬こ連できて、大事んして育でだべ。ほしたば、今畑で、ご掘れどて、わんわんでなぐおんださげあえ、掘てみだば、ほれさまさまの宝物あ出はてきたなだ」

て教へだど。ほしたば、隣のへちやへちや婆んば、

「この犬こあ、ほげあえたええ犬こが、んであ俺あ家さも貸してやれ。俺あ家でも掘らへでみつさげあえ」

ていうけど。ほんでも、爺さまも婆さまも、

「この犬こなの貸さんねあ。俺あ家の宝物だおん。とても貸さんねあ」
て断^{こと}わたども、貸へ貸へどて、むりむりどほの犬こ連で行たけどは。

ほの犬こ自分家^{おわえ}さ連で行ぐど、自分家の欲張り爺んじあどさ、

「爺々。隣りであ、この犬この吠えつどご掘たば、宝物あえつぺあ出はてきたけなよ。んだはげあえ、犬こ借りで来た。まず早く裏さでも連で行てみる」

て、爺んじあどご呼ばて、犬こやたど。

ほうすつど、爺んじあ犬こ裏さ連で行て、どごだどごだて犬こさ言^ゆたて、犬こあ吠えねあべ。んだおんださげあえ、爺んじあごしえで、ただえだりおつめだりして、ながへで、なえだどご掘てみだべ。んだて無理んながへらつだどからなの、なんにも出はるおんでねあんだはげあえ、めめずなの煉瓦かげなの、瀬戸^{へど}かげは

んて出はてこねけど。ほんでほつつこつつ掘てみだども、宝物なの出はてこねけど。

ほうすつど、嘘^{ずほ}こぎの欲張り爺んじあ、ごしえでしまて、こんた畜生^{ちきしよ}ああつたおんでねていうど、犬こあどご、ばえんばえんただぎ殺してしまて、ぶつとばしてやたけどは。

隣りのえぐなし爺^{けあ}んじあ、犬こ返^{けあ}さねあおんだはげあえ、爺さま、犬こ返してころて行たば、

「あんた畜生ああつたおんでねあ。俺あ家さば宝物どごんねあ、瀬戸かげなの、瓦かけなのばり出しあがて、見ろごみばりえつぺあ出はたは。んだはげあえ、あんな犬こただぎ殺して、裏のほれあ、ほごのごみやらさ、ぶつとばした」
ていうどけど。ほんで爺さまむぞせあくてむぞせあくて、死んだ犬こ自分^{おわえ}家さ持て行て、畑の隅こさ埋で、ほごさ松ぬ木植^ゆえで、毎日爺さまど婆さまあ、水あげで拝でいだけど。

ほしたば、ほの松ぬ木あ、どんどんおがて、そんま臼掘るえくれあんなたけど

は。ほんで爺さま、

「婆さま婆さま、松ぬ木ああんげあえ大つきぐなたし、俺あ家であ、ろぐだ臼あねあはげあえ、あの松ぬぎで臼でも掘てみつがや」

て、婆さまどさ相談したら、婆さまも、

「んだな爺さま。ほれあええな。んであ、あの松伐て臼掘てみろちや」

ていうはげあえ、爺さま、ほの松ぬ木伐て、臼掘たど。ほうしたば、婆さま、
「爺さま爺さま。こんげあえええ臼あ出来だおんだおん、餅でも搗で、犬こあど
さ上げつがや」

ていごどんなて、二人あ餅搗ぎ始めだど。ほうして、搗っだば、搗ぐたんびん、
ざぐらっ、ざぐらっど臼ん中さ金あ出はてくんだけど。ほんで爺さまど婆さまあ、
又宝物あ出はてきたどて、大喜びしっただど。

ほごさ、又、隣のへちやへちや婆んばきて、ほれ見では、たまげでしまて、

「ないしたてお前家であ、ええごどばりあるおんだ」

ていうけど。ほんで婆さま、

「家えであ、貸さんねあていう大事であじだ犬こ連で行て、殺してしまたはげあえ、犬こ埋んめだどさ植ゆえだ松で、臼掘ほて餅搗えだば、こんげあえ宝物あ出はてきたあだ」

て教へだど。ほしたば、隣りの婆んば、欲張りなおんだはげあえ、ほの臼借りであぐなて、自分の家さ走して行たど。

自分家さ行ぐど、自分家の嘘うそこき爺んじあどさ、

「爺さ爺さ。隣りの家であ、犬こんどさ植えだ松で臼ほて、ほの臼で餅つたら、宝物あえつぺあ出はてきたけあ、まず、荷繩にんな持て行てえ、早ぐあの臼借りできて、俺あ家でも餅搗でみろちや」

て言ゆたべ。ほうすつど爺んじあ、荷繩た持がて隣さ行て、臼貸へどて、やんやていうけど。へあづ貸さんねあていうな、むりむり借りで背負てきたけど。

隣りの欲張り爺んじど欲張り婆んばあ、なんぼが宝物あ出んべど思もて、すぐは餅米ふかして餅搗ぎ始めだけど。

ほうして、つでみだども、なんにも出はらねあけど。なんぼ搗でもただの餅搗ぎで宝物なのさっぱり出はてこねあべ。んだおんださげあえ、くたびつで、ごしや

げできては、ほの臼割て、かまどさくべでしまたけどは。

隣りで臼返けあさねあおんだはげあえ、臼とりん行たど。ほうしたば、

「あんた臼あ、なんにも出はらねあ唯の臼だけ。んだはげあえあんたおの、割てかまどさくべでくつだは」

つけど。爺さまあ、

「んだはげあえ貸さんねあ、て言たあだであ。んであ、仕方ねあ、灰ばりも貰らて行く」

て、ほの灰もらてきたど。

ほしたば、ほの晩、爺さま枕もどさ、犬こあ姿見へで、

「爺さま爺さま、今まで大事えまん育でもらたはげあえ、もう一ぺん恩返げあえする。

今日もらてきた灰、明日殿さまのお通りあつさげあえ、花咲が爺じい枯木に花を咲がせでみよう。て、大つき声で叫がで、枯木さ灰撒めあでみろ。ほうすつど、枯木さいづめん桜花咲あで、殿さま喜で、ごほうびえつぺあくえつさげあえな」

ていうど、見ねあぐなてしまて、爺さま目醒ましたけど。

ほんで爺さま、犬こゝ夢枕さたたあだはげあえ、ほんとのごどだべて、夜明けんな待ちっだど。

ほうしているうづん夜あ明げで、殿さまのお通りああるどて、村中の人あ出はてきて、道のわぎさ坐て待ちっだど。爺さまも灰持がて、枯木さ上がて、殿さま来んな待ちっだど。

ほのうづん殿さま来たけど。ほんで爺さま、大つき声で、

「花咲が爺じい、枯木さ花咲がせでみよう」

て叫がだば、殿さま馬止めでみっだけど。爺さまあ、まだ、

「花咲が爺じい、枯木さ花を咲がせでみよう」

ていうど、ざえっと枯木さ灰撒だど。ほうしたば、ほごら中さ灰あかがて、一面桜の満開の花あ、きれん咲^{せあ}だけど。ほんで殿さま喜で喜で、爺さまどさ、えっぺあごほうびくっだけど。とんぴん からんこゝあ ねあっけどは。

(話者 高橋キク)

3 花咲が爺じい

むがしあつたけど。

あるどさ、爺さまど婆さまいだけど。爺さま魚捕り好ぎで、川さ釣ん行たりすがつたど。

ある時、爺さまあ、隣りの爺いど共同で築^{やな}かげで、毎朝ま、二人あやな見ん、川さ出がげつがつたど。隣りの爺あ、欲張りで、時々自分^{おわ}ばり、暗^{くれ}あうづん行て、雑魚捕てくんだけど。

ほの朝まも、隣りの爺あ、こ早^{ばえ}ぐ行てみだど。ほしたば、雑魚ど混^{まじ}て、犬こあかがつたけど。欲張り爺あ、雑魚ばり捕て、犬こかまわねで、置えで来たあだど。明りぐなてがら、爺さま、やなさ行たば、雑魚あなんにもかがてねあで、めんごえ犬こばかりかがつたあだけど。ほんで爺さま、

「今日あ、犬こぼんで、雑魚あかがてねあども、めんごえ犬こで、ぶんなげでやんな、むぞせあはげあえ、家さ連でえて、婆さまど二人して育でんべ。子供もい

ねあし、わらすこ代りんすんべ。婆さまも喜ぶべ」

て、独り言ゆいながら、ほの犬こ懷^{しんこう}さ入^へで、家さ連で行たど。

ほうして、婆さまどさ、

「婆さま婆さま、まず見る。やなさ雑魚あさつぱりかがてねがったども、こげあえためんごえ犬こあ掛^かったはげあえ、わらすこ代りん育^もでだらえんねべがど思^もて、拾^{ひろ}てきた」

て言^ゆたば、婆さまも、

「あらあら。めんごえ犬こだごど。拾^{ひろ}てきてくつでえがったな、爺さま」

て、うんと喜で、犬この頭撫^なで、家^えん中^{ちゆう}さ入^へで行て、飯^まさ赤^{あけ}あえ魚^{とど}こ混^まじえで食^くへだけど。ほしたら犬こあんめあそんして、ほの飯^いべろつと食^くたけど。ほんで爺さまど婆さま、めんごがてめんごがて、自分わらすこみであん大事^{だいじ}んして育^もてっただけど。ほうして、ほの犬こあ、白^{しろ}えおんだはげあえ、名^な前^{まえ}白^{しろ}どつけだけど。

白^{しろ}あ、爺さまど婆さまに、大事^{だいじ}んされるおんだはげあえ、爺さま山^{さん}さ行^いげば山^{さん}さ、畑^{はたけ}さ行^いげば畑^{はたけ}さ、婆さま川^{かわ}さ行^いげば川^{かわ}さ、爺さまど婆さま行^いぐどごだば、ど

ごさでもつでありぐなだけど。

ほうしているうづん、白も大分^{であぶ}大つきぐなてきたけど。ほうしてなー、ある時^{つぎ}、

白あ、ないだおんだんだが、家の前^{めあ}で、わんわんて吠^わつけど。ほんで婆^{ばあ}さま、

「爺^{ぢい}さま爺^{ぢい}さま。ないなおんだべ白あ、めっぽうわんわんて吠^わえるおんだ。なんだが唯事^{ただごと}んねあよだ。早^{はや}ぐ出^ではて見^みでくんねあが」

つけど。ほんで爺^{ぢい}さま、出^ではて見^みだど。ほしたば白あ爺^{ぢい}さまどご見^みで、わんわんて吠^わえながら、爺^{ぢい}さまそばさ走^{はし}して来て、爺^{ぢい}さま、はがま（もんぺ）くわえで引^ひつ張^はつけど。ほんで爺^{ぢい}さま、

「なえだや白。ほんげあえ俺^{おれ}あどご引^ひつ張^はて、俺^{おれ}あどご行^いごていうなが。よしよし。どごさ行^いごていうなや」

て言いながら、白あ引^ひつ張^はて行^いぐ方^{かた}さ行^いてみだど。ほしたば、白あ家^えの前^{めあ}の松^{まつ}ぬ木^きんどさ引^ひ張^はて行^いたけど。ほして、吠^わえながら、前^{まえ}足^{あし}で松^{まつ}ぬ木^きの根^ねつこどご掘^ほてあ、後^{うしろ}足^{あし}で土^{つち}けつとばして、爺^{ぢい}さまどさ来て、はがま引^ひつ張^はり引^ひ張^はりすんなだけど。

ほんで爺さまあ、

「なんだや白。ほご掘れていうなが。よしよし、今、家から鍬持^かて来て掘っさげあえ、待て待て」

て、爺さま家さ走して行て、鍬持て来て、白あ掘た松ぬ木の根っこんどご掘てみだど。ほうして、大分掘たば、かちつてなんだが固^かあえ物さ鍬あだたはげあえなんだべど思て、又掘てみだば、瓶こみであだずおん。爺さますっかり掘てみだば、やつぱり瓶こだけど。

ほの瓶こ引つ張り上げるかんじよしたば、なんと重であおんで、爺さま漸ぐ引つ張り上げだど。ほんでほの瓶こ家さ持て行て、

「婆さま婆さま。まず来てみろ。白あわんわんて俺あどご引張て行て、掘れ掘れというはげあえ、松ぬ木の根っこんどご掘てみだば、こういうおのあ出はてきたけ。なになおんだが開けてみんべや」

て、二人して開げてみだど。

ほうしたば、ほの瓶こん中さ、金あえつぺあ詰まていだあだけど。爺さまど婆

さま、どでして、どでして、

「あらあら、まずまずたまげだ。金あ出はてきたちや」

て、眼丸まゆぐこぐしてたまげっただけど。ほうして、二人あ瓶がら、ほの金開げでみつだど。

ほうしたば、ほごさ隣りのへちやへちや婆んば来たけど。ほうしてほの金の山みつど、たまげで、

「なえだやは。まずまずこんげあええつぺあ金、どから持て来たおんだや。まずまずたまげだおんだ」

て、たまげで眼丸こぐしったけど。ほんで爺さまあ、

「表で白あ、わんわんて吠えで、松ぬ木の根っこんどご掘れていうおんだはげあえ、ほご掘てみだべ。ほしたば、この瓶こあ出はてきて、開げでみだば、こんげあええつぺあ金あ入（あ）つたはげあえ、たまげで見つたどごだ」

て教おへだど。ほしたば、隣りのへちやへちや婆んばあ、

「んであ、俺あ家の爺あどさも教へねあんねあ」

ていうど、どんどこ自分家さ走してえたけど。

へちやへちや婆んば、自分家さ行ぐど、

「爺い爺い。隣りの家であ、白に教へらつたどご掘て、金えつぺあ持て来たけあ、
お前めあえも行て、白あどご借りできて、掘てみろちや」

て言たば、隣りの欲張り爺んじあ、

「んであ、俺も白あどご借りできて、掘てみねあんねあ」

ていうど、隣りさ走して行ぐど。

「白あ、どご貸へちや。俺も掘てみつさげあえ」

ていうど、貸すても言わねうづん、白あ首くびとさ縄つけで、白あ嫌やだ嫌だていうな、
むりむりと引張て行たど。

ほして、白あどご、ほごらごら引張て歩て、ここがここが言たたて、白あ
さつぱりここだて吠えねあべ。ほうすつど、欲張り爺あごしえで、

「この畜生あ。なして教へねあ」

ていうど、縄ぐえぐえと引張たべ。ほうすつど、白あ首くびとあ痛であおんだおん。

きゃんきゃんてねあだべ。ほうすつど爺いたがりあ、

「白こごがつ」

ていうど、ほこんどご、じゃぎじゃぎと掘たど。ほしたば、がじゃがじゃど、瀬戸^{へど}かげなのばり出はて、金なのさつぱり出はて来ねけど。

ほうすつど、欲張り爺んじあごしえで、

「この畜生あ、俺あどさこんたおのばり出しあがて、ろぐでなし畜生あ」
ていうど、白あどご、鍬^かでぴばだぎづげで、殺してしまたけどは。

爺さま、隣りの爺んじあ、なんぼしたて白あどご返^けさねあおんだはげあえ、隣
さ行て、

「お前家^{めあええ}であ、なんぼしたて白あどご返さねあはげあえ、もらいん来た」
て行たど。ほうしたば、隣りの爺んじあ、

「あんた畜生ああつたおんでねあ。俺あどさばろぐだおの出しあがねあで、ごしや
げつさげあえ、ぶつ殺して、ぶなげてやた。ほごらあだり藪でも見んだ」
つけど。爺さまどでしてさがしたば、藪やらさ白あ死でだけどは。

ほんで爺さまあ、むぞせあくて、むぞせあくて泣きながら、白あどご抱^{であ}で行て、松ぬ木の根っこさ埋で、婆さまど二人あ、泣きながら拜^{はい}んでだけどは。

ほうしていたば、白あどご埋めだどこの松ぬ木あ、おがておがて、二、三年では、大木んなたけど。ほしたば、隣りの欲張り爺んじあ、ほの松ぬ木あ、自分家の畑さ邪魔んなつどて、断りもしねあで、ほの松伐^たてしまたけどは。

爺さま、白あお陰^{かげ}げで、折角^{せつかく}大木んなて、白あ魂^{たまへ}あこもた松ぬ木だていだおんだはげあえ、本当いだましがて、がっかりしていただけは。

んでも、伐^きらつでしまたんだし、なんずも仕方ねあ、ほれで白掘^{しろく}たど。ほして、ほの臼で米搗^うぎしたど。ほうして二、三度搗^うだば、なんだが、ちやりんという音あすつけど。爺さまおがしど思^{おも}て見だば、大判がら小判出^でてきたあだけど。又搗^うたば、又出^ではてきて臼^うさえつぺあなたけどは。爺さまたまげで、

「婆さま婆さま。まずまず、早く来て見ろちや。早く早く」

て叫^{こゑ}がだど。ほんで婆さま、何事あおぎだおんだべど思て、あたふためて、出はて来たけど。爺さまあ、

「まずまず、この臼ん中見ろ」

て叫がぶおんだはげあえ、婆さま走して来て、臼ん中見だど。ほして、

「あらあらつ、なえだやは。又こんげ金あ出はたながは。まずまず、たまげだ、たまげだ」

て、又眼丸こぐしてどでしつたけどは。

爺さまど婆さまあ、あんまり叫がぶおんだはげあえ、前の畑にいだ隣りの欲張り爺んじあ、ないだべど思て、走して行て見だど。ほしたば、ほれ、臼ん中金でえつぺだべ。ただたまげでいだけど。ほして、

「なして、こんげあえ金あ出はたおんだや」

て聞くけど。ほんで爺さまあ、

「この臼で米搗ぎしつたば、出はてきたあはげ」

て教へだべ。ほうすつど、隣りの欲張り爺んじあ、

「んだら、俺あどさも、ほの臼貸してみろ」

どて、ほの臼貸さんねあていうなもかまわねあで、むりむりど自分家さ背負て

行てしまたけどは。

ほうして、庭さ下ろすど直ぐは、米搗ぎ始めだけど。ほうして、ほら金あ出はてくんぞど思て搗えだら、なんだがさぐらさぐらつていう音あすつさげあえ、ほらつ金あ出はたど思て見だば、木の切端どが、瀬戸かげなのばり、がらがらど出はてきて、金なのさつぱり出はらねあけど。んだおんだんだはげあえ、欲張り爺んじあごしえで、

「まだこんたおのばり出しあがて、こんた白あ、あつたおんでねあ」

ていうど、まさがり持てきて、ほの白ばえんばえんど割てしまて、かまどさくべで、焼えでしまたけどは。

爺さまあ、隣りであ、白持てえたきりで、戻すじゃねあ。ないなおんだべど思て、もらいん行たど。ほしたば、隣りの欲張り爺んじあ、

「あんた白あ、あつたおんでねあ。米搗えだら、金どごんねあ、瀬戸かげなのばり、がらがらど出しやがて、あんまりごしやげつさげあえ、あんおの、割て焼やしてしまたは」

つけど。ほんで爺さまあ、

「んだはげあえ貸さんねあ、て言たあだであ。焚えでしまたあだば仕方ねあ。白あ形身だおん。灰ばりももらてえぐ」

て、ほの灰もらて来たど。

ほうして、ほの灰、白あどご埋つだあたりさ、ざえつと撒だど。ほうしたば、ほの灰あ風で飛ばさつで、ほごらあたりの枯木さかがたけど。ほしたば、灰のかがた枯木さみな花咲えだけどや。ちようどほごさ、殿さま、馬さのて通りががて、ほれみで、どでして、

「爺い爺い。あんまり珍らす。もうえつぺん咲がへでみろ」
つけど。ほんで爺さま。

「んですか。んでももう一回してみあすべちや」ていうど、
「この枯木さ、みな花咲げ」

て、残た灰、ほごらあたりの枯木さ、ざえつと撒えだど。ほしたば、ほごらあたりの枯木あみな花咲えだど。

殿さま、喜で、喜で、

「これは見事、見事」

て、扇振^ふてだけど。ほうして、爺さまどさ、えっぺあごほうびくつだけど。

ほの話聞だ隣りの欲張^{よこ}り爺んじあ、んであ、俺も花咲がへで、殿さまがらごほうび貰わねあんねあていうど、残た灰、ざえざえとさらて、殿さま来んな待ちつだど。

ほれがら、何日^{えつか}がしてがら、又、殿さま馬さのて来たけど。ほうすつど欲張^めり

爺んじあ、枯木さ上^めがて、

「花咲が爺んじあ、枯木さ花咲がへで見^めへあす」

て、太つき声で叫^めがだど。ほうしたば殿さま、

「そうが。そんなら咲がへで見^めへろ」

ていうおんだはげあえ、欲張^めり爺んじあ、喜で、

「この枯木さ、ありつたげ花咲げっ」

て言^ゆいながら、ざえざえど灰、すこであま撒^ゆえだど。

ほうしたば花なのさつぱり咲がねあで、ほの灰あ、殿さまや家来達だつの眼まなぐさなの
ばり入へてしまたけどは。んだおんだんだはげあえ、殿さまごしえで、

「この嘘うそこき爺ぢんじあ、花も咲がへれねあで、ろぐだごどしねあ。ふんずぱりづ
けで、牢さぶづ込こでしまえ」

て、ただ、しこであまひばだがつで、あげぐのはでにあ、牢さぶづ込こまつでし
またけどは。

んだはげあえ、欲張よくぢやうて、人真似ひとまねしたて駄目だめだおんだど。とんぴん からんこあ
ねあつけどは。

（話者 舟生カネヨ）

4 かちかち山

むがしあつたけど。

あるどさな。爺いど婆んばいであつたど。爺あまだ、畑さ豆撒ぎん行たど。

ほうしてな。畑掘て、畦つくて豆撒ぎ始めだど。爺あ、

「一粒あ千粒なれしとぶ。一粒あ千粒なれへん」

て言いながら蒔めつだど。ほしたば、何時の間こめあえん来たおんだが、狸あ来て、

石の上ゆえさ坐て、爺あ、「一粒あ千粒なれねま」ていうど、石の上の狸あ、

「一粒あ一粒でけづがれ」

て叫こゑぶずおん。爺あごしえで、石こぶからむど、ほんずぎあ逃げねんども、まだ

直ぐ来て、爺あ、

「一粒あ千粒なれ」ていうど、

「一粒あ一粒でけづがれ」

て悪態あくであえつぐずおん。爺あごしやげでごしやげで、畜生えまこあ、今ん見でけづがれ。

人しとんどさ悪態あくであえつぎあがて、必ずとつかめあえでくえつさげあえ。ていだけど。

ほうして、次の日、爺あ鳥鶺もつつこしえで、石の上ゆえさべだべだど塗たくて置えで、

知らねあ振りして、又豆蒔まぎしたど。ほうして、

「一粒あ千粒なれ、一粒あ千粒なれ」

て蒔^まつたば、まだ狸畜生来て、

「爺あ豆なの、一粒あ一粒でけづがれ」

て叫^こぶずおん。爺あ縄持^たて、「この畜生あ待^たで」て叫^こぶど、狸あどご追^おて行^いたずおん。

狸あ、どでして、逃^ねげるかんじよししたども、尻^{けつ}さもつつあくつつでは、逃^にげらんねけど。ほんで爺あ、狸あどごひばだぎづげで、

「この畜生あ、ぶただぎづげで殺^{ころ}してくえる。このえぐなし畜生あ」
て、狸あどご、縄^{ふんがら}で縛^はで、家さ背負^{せお}て行^いたど。

ほうして、庭で米搗^うぎしつた婆んばどさ、

「婆んば、狸のえぐなし畜生あどご捕^{しめ}できた。庭さつるしておぐはげあえ、縄解^ゆぐなよ」

て言^いて、爺あ、又豆蒔^まぎん畑^{はたけ}さ行^いたど。

婆んば庭で米搗^うぎしつたば、狸あ婆んばどさ、

「婆さま婆さま。ほの年で米搗きなて、くたびつで楽んねあべあ、俺あ搗えでくえっさげあえ、縄解えてけろや」

つけど。婆んば、

「縄なの解がんねあ。爺さまにごしやがえっさげあえ、駄目だ」

てゆたば、狸あ、

「米あ搗ぎ上がつど、俺あ、又縛らえっさげあえ、心配すねあで解えでころちやや」

て、狸になんべんも言わ^ゆつで、婆んば、狸あ縄解えでくつだど。ほうしたば、

狸あ、婆んば代りん、一生懸命搗えで、ええあんべあ搗ぐど、

「婆さま婆さま。搗げだくれあんねあが、みでくつちやや」

ていうずおん。ほんで婆んば、臼さかだがて搗ぎ按配みだど。ほしたば、狸あ、婆んば頭、杵で、ばんえら搗で、婆んばどご殺してしまたけどは。

ほうしたけあな。婆んばどご煮で、狸汁の代りん、婆んば汁作て、自分^{おわ}婆んばんなて、爺あ来んな待ちつだど。

晩方しめあえん、爺あなんにも知らねあで、家さ夜上がりして来たど。ほうすつど、婆んばんなた狸あ、

「爺さま爺さま。なんぼがくたびつたべあ、まず早く上がれ。腹減たべど思て、狸汁こしえで待ちつたは」

て、愛想のええごどいうけど。爺あ、

「ねあだてえぐ作たごどな」て言たば、狸あ、

「まずまず、早くあなたが、味みてころ」

ていうおんださげあえ、爺あ、

「んだがんだが、んであ食てみんべ」

て食つたけど。ほしたば狸あ、「爺さま。なんとや」つけど。ほしたば爺あ、にちやにちやどかみながら、

「なえだてしねあ肉な、年寄り婆んば肉みであだな」

ていうけど。ほうすつど、狸あ本性あらわして、

「爺あ、狸汁食うどて、婆んば汁食た食た」

て言いながら、逃げで行たけどは。爺あ、はつと思て、

「このえぐなし畜生あ、人の家の婆んばどご殺しやがて、待でーこの畜生あ」
て追かげだども、追がんねあくて、逃げらつでしまたけどは。

爺あ、口惜しくて口惜しくて、ただ泣っただは。ほしたば、ほごさ山がら兎あ
来て、

「爺さま爺さま。なして泣っただや」

て聞くけど。ほんで爺あ、

「狸汁すんべどもて、捕てきた狸、庭さ下げっただなよ。ほしたば、知らねあうづ
ん、狸あ、婆んばどご殺して、婆んば汁食へらっただなよ」

て泣でっずおん。ほしたば、兎あ、

「なんだて、あのえぐなし畜生あな、よしつ、俺あ仇とてくえっさげあえ、ほん
げあえがおんな」

て、爺あどご、慰めでくっただけど。ほうして、次の日、兎あ狸穴さ行て、
「狸々なにしったや」て言たば、

「なんにもしてねあ」つけど。ほんで兎あ、

「んであ、俺ど山さ柴刈りんあべちや」

て言^ゆたど。ほしたば、狸あ、

「んだな。なんにもしねあでいるより、んであ、柴刈りんでも行ぐが。んでもええどごおべつだがや」

ていうけど。兎あ、

「あー。おべつだおべつだ。俺あどさつでこえ。ええどさ連で行ぐはげあえ」
ていうおんだはげあえ。

「んであ、連^つで行^えごや」

て、兎ど狸あ、柴刈ん行たど。ほうして、えっぺあ刈て、帰^けえて来たど。ほうして、途中^くまで来つど、狸あ後で、なんだがkachちつちつていう音あすつずおん。ほんで、狸あ、

「兎々。俺あ後で、なんだがkachちつちつていう音あするよだども、ないだや」
ていうけど。ほれあ、兎あ、狸あ背負った柴さ、火つけでくえんべど思て、火

打石で火出すべど思て、かちかちどしつたなだども、兎あ知らねあ振りして、

「んだべや。ここあ、かちかち山だおの、かちかちていうんだはげあえ」

て言^ゆたば、狸あ騙^うさつて、

「ほつがあ。ここあかちかち山ていうながー」ていだけど。

ほうして、又ずうつと行たど。ほしたば、今度、狸あ後で、ぼうぼうていう音あすつけど。ほんで狸あ、

「なんだや兎。今度、ぼうぼうていう音あするんねがや」

ていうけど。狸あ、自分背負てだ柴さ、兎に火つけらつたな知らねあべ。狸あ背負てだ柴、ぼうぼうど燃えできたけど。んでも、兎あ知らねあふりして、

「なんだ。知らねあなが。ここあぼうぼう沢だおん、ぼうぼうて音あするんだはげあえ」て言^ゆたど。

ほのうづん、狸あ背負てだ柴あ、どんどん燃えできたべ。ほうすつど、狸あ熱つぐなてきて、

「熱つ熱つ。なんだべ、俺あ背^{へなか}中火事だー。熱つじゅ熱つじゅ」

て走したべ。走すれば走するほど風で、返て火あ燃えるんだおん。狸あ、大火傷してしまて、自分穴さ入て、うーん、うーん。てうなて寝っただけどは。

ほれ見っど、兎あ今度、芥子えっぺ入た味噌作して、枥の葉さくるで、次の日薬屋んなて、狸あ穴さ行て、

「薬屋です。越中富山の薬屋きあした。何が薬のご用ござへんか」

て行たど。ほしたば、ほれ、狸あ大火傷で痛であがているおんだおん、直ぐに、

「火傷のくすりあねあが。火傷のくすりくんねあが」
て言たずおん。ほんで兎あ、

「火傷の薬だば、うんとええなある。どご火傷んしたや」
て言たば、狸あ、

「背中だ。背中大火傷したあだ」

つけど。ほうすつど兎あ、知らねふりして、

「どれどれ。背中出へ。この薬あええ薬だはげあえ、しみで痛であぞ。痛であたて、ほご我慢してねあば、治らねあぞ」

て、すこであま辛^{かれ}あ芥子味噌、狸あ背中うづさ、でらでらど塗てくつだど。芥子味噌だおん、背中うづさしみで、ほの痛であごど痛であごど。狸あ汗出しながら、鉢巻きして、

「痛であちやー。痛であちやー」

て、涙ぼろぼろどこぼしながら、我慢しつたけど。んでも暫^{しばら}ぐすつど、大分^{であえぶ}えくなたけど。ほうすつど、今度あ、兎あ木ど土で舟こしえだど。ほうして、狸あどさ行て、

「狸々。大火傷したじゆ話だども、なんずだや」

て言^ゆたど。ほしたば狸あ、

「こねあだ、兎あ火傷の薬だて、すこであ辛あ芥子味噌、俺あ背中さ塗りあがて、ほの痛であごど痛であごど、本当ん死ぬ目あた。あの兎畜生^{ちきしよ}あ、どこの畜生なんだが、ひどえ畜生なおんだ。んでも、こんだ大分えくなた」

ていだけど。兎あ、知らねあふりして、

「ほんたひでごどすんなだば、かちかち山の兎だべ。俺だみであん、海んどこの

兎だば、ほんたごどするおのあいねあおん。んであひでー目んあたな。んであ丁度え、気晴しん、舟さのて遊ばねあが、俺あ新し舟こへあで、昨日出来だばんだ。のりそめして遊ぶべや」

て言たど。ほしたば、狸あ、

「んだな。ほれだば面白べな。んであ連でえこや」

て、兎ど行たど。ほうして、

「狸々。お前あこつつんなさ、のれ。俺あこつつんなさのつさげあえ」

て、狸あどご土舟さのへで、兎あ木の舟さのたど。ほして、二人あ、こえで行たべ。ほうすつど兎あ、

「木の舟あすえっすえっ。土舟あがぐらがぐら」

て言いながら、漕えで行たど。ほのうづん、木舟あ、すえっすえど行くども、土舟あがぐらがぐらど、あつつあ欠げ、こつつあ欠げ、欠げできたべ。狸あどでして、

「これあないだや。舟あ欠げできたじゆは」

て、舟さ水あ入てくるおんだはげあえ、大騒ぎ^{へあ}だけど。兎あ、

「ほの舟あ、土舟ださげあえ、今沈^{すず}むなだ、ざんまみろ。えぐなし畜生あ。婆さまどご殺した仇討ちだ」

て言^ゆてるこめん、狸あ舟あ、沈できて、狸あ、あぶあぶてるこめん、沈で見^めねあぐなてしまたけどは。

んだはげあえ、人^{ひと}んどさえぐねあごどさんねあなよ。とんぴん からんこあねあつけどは。

(話者 高橋久雄)

5 舌 切り 雀

むがしあつたけど。

むがし、あるどさな、爺さまど婆さまあいだけど。ほうして、爺さまあ、雀

一匹大事^{であえじ}んして飼^かただけど。ほの雀こあなづで、爺さま肩^{かた}さでも、手出へば手さでものんなだけど。んだはげあえ、家ん中さ離^{はな}しておぐなだけど。

ある時^{とき}な。爺さま畑^{はたけ}さ行^いて、婆さまあ、障子^{しょうじ}の張り替^かえしつたがったど。ほうして、婆さまあ糊^ね練^ねて、古い障子紙^{しょうじ}はがしていだど。ほうしてゐるうづん、雀こあ、婆さま練^ねておえた鍋^{なべ}この糊^ね、ぺろつとみな食^くてしまたけどは。婆さま新^{あらた}し障子紙^{しょうじ}張^はんべど思^{おも}て、糊^ねみだば、鍋^{なべ}この縁^{えん}さ雀こあ上^あがてで、糊^ねあさつぱりなくてだべ。婆さまあごしえで、

「この畜生^{ちくせい}あ、糊^ねみな食^くてしまて」

ていうど、雀こあどご捕^{とら}で、雀こあ舌^{しほ}、缺^{けつ}ではさでしまたけどは。雀こあ痛^{いた}であがて、ちゅうちゅう鳴^なぎながら、川の向^{むか}うの、栗林^{りしん}の中^{なか}さ飛^とで行^いてしまたけどは。畑^{はたけ}にいだ爺^{おや}さまあ、自分^{おのれ}家^{いえ}の方^{かた}がら、雀こあ鳴^なぎながら、頭^{かぶ}の上^{うへ}飛^とで、川の向^{むか}うさ行^いてしまたはげあえ、雀こあ何^{なん}したおんだべて家^{いえ}さ行^いて、

「婆さま婆さま。雀こあ鳴^なぎながら飛^とで行^いぐけあ、何^{なん}したおんだや」
て、婆さまどさ聞^きだど。ほしたば、婆さまあ、

「あんたおのあ、あつたおんでねあ。私あ障子貼んべど思て作た糊、ぺろつと食てしまて、障子貼らんねあぐなてしまたはげあえ、ごしやげつさげあえ、舌切て放してやたあだ」

ていうけど。ほうすつど、爺さまあ、むぞせあぐなて、

「なえだて、糊食たくれあで、舌なの切たながは、むぞせあごどしたおんだ。まずさがしてこねあんねあ」

ていうど、爺さまあ、橋渡だて、川向うの栗林んどさ行て、

「俺あ家の舌切らつた雀こあ、どさ行たべ」

て呼ばたど。ほうしたば、林の奥の方がら、めんごげだあねこあ出はてきて、

「爺さま爺さま。俺あ家あこつた。えぐ来てくつたごど。まずまず、俺あ家さ行でころ」

て、爺さまどご、自分家さ連で行たけど。ほうして、爺さまどご、奥の間さ坐らへで、

「爺さま爺さま。今まで爺さまに大事にして、面倒みでもらたはげあえ、今日あ

ご馳走つっおすつさげあえ、ゆつくりして行てころ」

て言て、ご馳走ゆえつぺあ出して、爺さまどき酒こ飲まへだけど。

ほうしてゐるうづん、あねこあ達だあぞろぞろど出はてきて、唄こはうだう、踊りこは踊る。種々の鳴り物おもへならして、どでもにぎやがんにしてくつだけど。ほんで爺さまあ、面白くて面白くて、時あ経たづなも忘つで、ご馳走なてるうづん、晩方しめあえんなたけどは。ほんで爺さまあ、

「おおぎんご馳走さんでしたは。晩方しめあんなたはげあえ、帰けえらへでもらいあすは。本当に面白がつた」

て、爺さまあ帰えつどごだけど。ほしたば雀こあ、

「爺さま爺さま。んであ、これお土産ん持て行てころ。この葛簞こうりのうづ、重であ方でも、軽い方でもええはげあえ、どつつが持て行てころ」

つけど。ほんで爺さまあ、

「ご馳走なた外ん、お土産までくつでくえんなが。気の毒だとしよりごどな。んであ、折角へっだはげあえ、ずんぎなしん貰て行ぐが。んでも、俺あ年寄としよりだはげあえ、軽え葛簞

の方あえげあえすは」

て、軽え方の葛簞背負わへでもらて、川端まで雀こに送てもらて、家さ帰えたけど。

ほうして、家さ行ぐど、

「婆さま婆さま、今帰えて来た。なんと雀こにご馳走してもらて、遅ぐなたは、雀こあ帰りしめあん、お土産だて、こげあえた葛簞背負わへでくつだども、まづなえなおんだんだが、開げでみでくつちや」

て、婆さま前さ、葛簞下ろしたど。婆さまあ、

「ほう。ご馳走なた外ん、こげあえお土産までもらて来たながは。えがったな爺さま」

て言いながら、ほの葛簞開げで見だど。ほうしたば、種々の宝物さまざまあえつたからおのへあ入つたけど。ほんで爺さまど婆さまあたまげで、たまげでいただけど。

ほげあんしてつどさ、隣りのめくされ婆んば、「お晩です」て来たけど。ほうしてほの宝物見だべ。ほうすつどたまげで、

「たまげだちや、たまげだちや。この宝物どから持て来たおんだ」

て聞くけど。爺さまあ、人あええおんだはげあえ、

「俺あ飼てだ雀こあ、婆さまの障子張る糊食てしまたごだど。ほんで婆さまごしえで、雀こあ舌切て、放してやたあだど。ほんで俺あ、ほれ聞ぐどむぞせあぐなて、雀こあなんとたべど思て、雀こあ家さ行たば、雀こあ、えつぺあご馳走してくつで、帰えりしめん、お土産だて、呉つでよごしたあだけ」

て教へだど。ほしたば、隣りのめくされ婆んば、

「ほれあええご聞だ。んであ、俺あ家でもしてみねあんねあ」

ていうど、自分家さふつとで行たけど。ほうして、自分家の爺あどさ、

「爺い爺い。今隣りさ行たば、雀こあどから、えつぺあ宝物もらてきつたけ。雀どさ糊食へで、舌切て、放してやて、雀家さ行てもらて来たあだど」

て聞かへだけど。

ほうして次の日、雀こ捕できて、婆んば、むりむり糊食へで、舌切て放してやたど。ほしたば、やっぱり川向うの栗林さ飛で行たけど。ほうすつど、婆んばあ、

「爺い爺い。雀こあ飛で行たぞ。まず、早く行て来え」

て、爺あどご、雀こあ家さやたけど。爺あ、

「雀こあ家あ、どごだべな」

て、川向うの林の中さ行たば、やっぱりめんごげだあねこあ出はて来て、

「爺さま爺さま。えぐ来てくれだ、えぐ来てくれだ」

て、自分家さ連^つで行て、ご馳走^えして、唄たり、踊たりして見へだけど。んでも、

爺あ、宝物早ぐもらいであくて、ゆつくりご馳走なてらんねあぐなて、そんな酔たふりして、

「なんとえつぺあご馳走なてしまて、酔てしまたは、これ以上ご馳走なつど、帰えらんねぐなつさげあえ、これで帰えしてもらいあすは」

て、立たけど。ほうしたば、やっぱり雀こあ、葛簞出してきて、

「なんにもねあども、この葛簞お土産ん持て行てころ」

て、軽え葛簞と重え葛簞ど出してきたけど。爺あ欲張^{よじ}て、

「んであ、折角だおん。重であ葛簞もらて行ぐが」

て、重であ方もらて来たど。ほうして橋渡つどは、ほの葛簞くわだひつきん中見であくて見
であくて、だまてらんねあぐなて、下ろして開げで見だど。ほうしたば、中から
蜂はちなの蛇へびなの蝦えび蛙か、ほれさ化物まで出はて来て、爺あ、蜂にあ刺されんだが、
蛇にあかづらえるんだが、痛であくて痛であくて、ほれさおかねあもおかねあく
ておえんおえんて泣きながら家さ来たけど。

婆んばも欲張りだおんだはげあえ、爺あ宝物背負て、そんま来んべどもて、着
物なのええな持て来んべというなで、自分ぼろ着物みな堆肥塚こえさふつとばしづげ
で、腰巻もしねあで、裸んなて、屋根の上さ上がて、股んどさばお腕こで蓋して、
爺あ来んな待ちだど。

ほしたら、爺あ痛であくて、おえんおえんて泣きながら来たべ。ほうすつど婆
んばあ、ほの声聞で、

「ああ、俺あ家の爺あだ、面白おもへくて唄がけで来るは」
て見だど。ほのうづん爺あ、近ぐさ来たべ、ほんでええぐ見だば、爺あ何
にも背負わねあで、泣きながら来んなだけど。

ほれ見つど婆んばあ、お腕こなのぶん投げで、屋根がら下りで、ごしえでごしえで、ぶんぶんで、庭で裸足で、子供達^{わらし}あだだこねるみであん、足ぶみして、わあわあど、わけの分らねあごど叫^こがんだけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 舟生カネヨ)

6 こぶとり爺さま

むがしあつたけど。

あるどさなあ、頬^{ほたば}さこぶあでつた爺さまいだけど。ほの爺さまあ、頬^{ほたば}さこぶあ下がているおんだはげあえ、何するたて邪魔で邪魔でしよねあがつたど。

ほんでなんとがほのこぶ取れるように、ていうなで、裏山にある地蔵^ずさんさ、三七あ二十一日の願かげで、毎晩お参^{めあえ}りしつたけど。

ほうして、二十一日目の晩、爺さまあ、又裏山の地蔵さんさ登て行たど。ほうしたば、なんだが地蔵さんどごあ、にぎやあがだけど。ほんで、爺さまあ、こんげあえ暗ぐなてがら何なおんだべ。ど思て行て見たど。

ほしたば、鬼こあ達^だあ、地蔵さんの前^{めあえ}で、火焚^{てあえ}で、ほごの広場で踊つたあだけど。

へ
ほうえほえ ほうえほえ

あつつの山がら こつつの山がら
集^{あつ}ばれ集ばれ みな集ばれや

こつつ山であ 竹の子伸びろ

あつつ山であ わらびこあ伸びろ

伸びだ伸びだ 竹の子あ伸びだ

伸びだ伸びだ わらびこあ伸びだ

あんまり伸びで 天^とまで届づだ

てえんてえん てんてんてんのほうほ

てえんてえん てんてんてんのほうほ

て、ほれこそ面白そん踊ったけど。あんまり面白おんだはげあえ、爺さまも、手振り足踏みしていだど。ほのうづん調子さのては、自分おわも知らねあうづん、鬼こあだど一緒なて踊ったけどは。

へ てえんてえん てんてんてんのほうほ

てえんてえん てんてんてんのほうほ

ては、爺さまあ、鬼こあだつあ混まぎて、夢中んなて踊たけど。

「そんま夜あ明けつさげあえ、あどあ明日又集ばて踊んべ」

ていうけど。ほうして、爺さまどさ、

「爺さま爺さま。あんまり踊り上手じよんだ。明日も晩に來えちや。おかげで面白がつ

た」

ていうけど。ほしたば、別の鬼こあ、

「この爺さま、明日來ねあどえぐねあはげあえ、爺さまの大事だこぶ取ておくべや」ていうけど。ほしたば、他の鬼こあだも、

「ほれあえ。ほれあえ」

ていうけど。ほうして、爺さまこぶ取て、持て行てしまたけどは。

爺さま喜で、頬撫でだば、つるつるて頭軽くなたけど。ほうして、家^えさ行て、
「婆さま婆さま。まず見ろちゃ。鬼こあだに、頬のこぶ取てもらてきた」

て言^ゆたば、婆さまあ、

「あらあらっ。爺さまあ頬あきれんたであ。えがったえがった」

て、二人^{したり}して喜で、これも願かげで、神仏さ願たご利益なんだていうなで、神
棚さお神酒上げで、お礼参りしたけど。

ほうしたば、ほごさ隣のへちやへちや婆んば来たけど。ほうして、

「お前家であ、神棚さお神酒やお灯明上げで、何ほんげあえ祈ったおんだや」
て聞^きぐけど。ほんで爺さまあ、

「夕べ暗^{ゆべな}くなてがら、こぶ取てころて願かげつた地藏さんさ、お参り行たなよ。

ほしたば、鬼こあだえつぺあ集^まばてで、踊り踊ったけなよ。ほんで面白^{おもしろ}くなて、
鬼こあだどさ混^まて踊^またば、帰^{かえ}りしめん、鬼こあだ、俺あ、あまり踊^{じよん}り上手だど

て、明日の晩も来て踊^ゆれて言^いわっだなよ。ほして、明日来ねあえどえぐねあは
げあえ、爺あ大事だこぶ、明日まで預^{あづか}りておげどて、俺あこぶ取てくつだあはげ。
んだはげ有難であくて、拝^{かえり}んだあだ」

て教へだど。ほしたば、隣のへちやへちや婆^{ばあ}んば、

「んであ、俺あ家の爺あどごもやらねあんねあ」

ていうど、どんどど自分家さ走して行^いたけど。ほうして、

「爺い爺い。隣の爺さまあ、裏の地藏さんさ行て、鬼こあだど踊て、こぶ取て
もらて来^きたつけぜあ。お前も行て取てもらてこえちや」

て言^いたど。爺もこぶあ出^でで、邪魔だおんだはげあえ、ほの晩暗^くくなつど、裏
の地藏さんさ行^いたど。

ほうしたば、やつぱり地藏さんの前の広場で、鬼こあだ火焚^{てあ}えで、

へ ほうえほえ ほうえほえ

あつつの山がら こつつの山がら

集ばれ集ばれ みな集ばれや

こつつ山であ　竹の子伸びろ

あつつ山であ　わらびこあ伸びろ

伸びだ伸びだ　竹の子あ伸びだ

伸びだ伸びだ　わらびこあ伸びだ

あんまり伸びで　天まで届とづだ

てえんてえん　てんてんてんのほうほ

てえんてえん　てんてんてんのほうほ

て踊ったけど。爺あ踊んねあんだし、そばねまさ坐て、手えじばり動がしたけど。

ほしたば、鬼こあだ、爺も踊れどて手引張たけど。ほんで爺あ仕方ね立て踊た

ど。んだて下手だおんで下手だおんで、見でらんねあけど。ほうすつど鬼こあだ。

ほれて見て、

「夕ゆべなべの爺あこんげあえ下手んねあがった。ほれさこぶもある。ろぐだ踊りも踊

んねあで、なにしん来た」

つけど。ほんで爺あ、

「夕べ隣りの爺さまあ、こぶ取てもらたて喜で来たはげあえ、俺も取てもらいであ
くて来たあだ」

て言^ゆたずおん。ほしたば、鬼こあだ、

「なえだど。こぶあ大事だおんだと思たら、いらねあおのであつたなが、んであ、
ろぐでもねあ踊り踊て、折角^{へっかく}のお祭りぶちごわしてしまたはげあえ、お前どさこ
のこぶくつげでやる」

ていうど、こぶのつでねあ方^{ほたば}の頬き、ほのこぶびだつくつつげらつでしまた
けどは。

ほんで爺あ、両方の頬きこぶぶら下げで、泣きながら家さ行たけどは。んだは
げあえ、人の真^ま似^ねなのしたて駄目だおんだど。とんぴん からんこあ ねあつけ
どは。

(話者 高橋良雄)

7 長者むかし

むがしあつたけど。

むがし、あるどさなあ、金持だ長者いだけど。ほうしてな、ほの長者まだ、ほれこそ立派だ金の盃持てで、宝物おのんして、うんと大事んしたけど。

ほうしてなあ、ほの大事んした盃あ、ある時なんずんしたおんだが、見ねあぐなてしまたけどは。ほうすつどほれ、金の盃だべ、長者いだましくていだましくて、うんとさがしたど。なんぼさがしたて、出はて来ねあけどは。

ほんで仕方ねあ八卦おぎどご頼て、八卦おえでもらたど。ほんでも、ほの八卦おぎあ、

「俺だば、なんぼおえでも分らねな」

つけど。ほんで困ては、んであ、あつつの八卦おぎあええんねあべが、こつつの八卦おぎあええんねあべがて、あつこつの八卦おぎにおえでもらたど。どこの八卦おぎも、分らねあ、分らねあてばりいうけど。ほんで長者、いだましくてい

だましくて、困て困ていだけど。

ひとり

丁度ほの頃、どから来たんだが分らねあ、一人の男人あほの村に来て、誰も泊める人あいねあおんださげあえ、村の古えお堂さ泊まだど。ほしたば、夜中ん、かちゃんかちゃんて、金の音あすつさげあえ、目醒したけど。ほうして見つたば、金の盃あ引張て来て、お賽銭箱の中さ、ほの金の盃、かちゃんと落して行てしまたけどは。ほの男人あ、

「あらあら、不思議だごど、鼠あ金の盃なの引張て来たちやは。なえなおんだべ」て見つたど。

ほうして、次の日なたれば、ほれ、長者家であ、金の盃あなぐなたて大騒ぎだべ。ほうして、あつっこつつの八卦おぎん八卦おえでもらたども、分らねあがつたていう話だべ。

かんげあ

ほんでほの人あ考えだど。この神社、あんまり古ぐなて、みな朽ぢでしまて、雨漏りするよんた有様だおん。だんまておがんねあ。これあしとづ八卦おぎのふりして、この神社直へば出る、ていうごどんしねあんねあて考だけど。ほうへば、

長者ばりんねあ、村の人達したつも神仏大事んするよんなんべていうなで、長者家えさ行
たど。ほうして、

「お前家であ、何がとても大事だおのなぐしたていう話だども、ええごつたら、
俺あ八卦おえでみでくえつが」

て言ゆたど。ほしたば、長者あ、

「なんとが頼みあす。誰あどさおえでもらたて分らねあ分らねあてばりいうおん
だはげあえ、うんと困てだあだ。なんとがおえでみでころ」

て頼むけど。

ほの人あ、八卦なのおえだごどなのねあなで、八卦なの知らねあなだども、ま
ず、覚おべつたふりして、八卦おぐまねあしたど。ほうして、

「ああ、これはどうも、ここの村の人達あ、神仏あんまり大事んしねあよだ。ん
だはげあえ出はらねあえよだ。まず、村はずれの神社腐つで、神さま雨でぬれる
おんだはげあえ、ごしえつだあだ。んだはげあえ、長者先んなて、あの神社直へ
ば出はてくる」

て、真面目だ顔つらして、如何にも本当らしぐゆたべ、ほんで長者あ、
「んですか。あの神社さっぱりかまわねでいだな、俺あらだ悪りがった。んであ、早
速、新しく建で直しあす」

ていうけど。

ほうして、早速ほの神社、村の人達ど一緒なて、建で直したど。ほん時つぎお賽
錢箱も朽くちったはげあえていうなで、ほの古えお賽錢箱がら、ほの金の盃あ出はて
きたけど。ほんで長者うんと喜だけど。

ほうしてゐるうづん、長者の娘あ、病氣んなて、あつつの医者だ、こつつの医
者だ、て頼で診でもらたて、治つずあねあけど。ほうして、だんだんやへで行く
ばんだけど。

ほんで長者あ、医者駄目だば、んであ、八卦おぎに、何故治らねあなだが、見
てもらわねあんねあ。ほれも他の八卦おぎだば駄目だはげあえ、この間の人頼ま
ねあんねあ、ていうなで、長者あ、

「俺あ家の娘あ病氣で、どこの医者も治へねあはげあえ、どごあ悪えぐねああだが、

どうが八卦おえでんねあが」

てほの人どき頼みん行たけど。

んだて、ほの人あ、本当の八卦おぎんねあべ。んだおんだんだはげあえ、困て
しまたけどは。んだて、長者ごどんしてあ、ほれ、誰もあでかねあだ、金の盃の
あつご当だ人だおんだはげあえ、この人より上手だ八卦おぎあいねあどもて、
頼みん行たわけよな。ほうして、

「どうが、娘死なへだくねあはげあえ、なんとが頼みます」

て頼むべ。んだはげあえ、こねあだんな鼠あ引張てくんな見つだあだ。ても言わ
んねあくて、仕方ねあ、

「んであ、明日おえであげあす」

て、返事してしまたけどは。

ほして、返事してしまてがら、困て困ていだけど。んでもまず寝たど。ほうし
たば、ほの晩、夢ん中さ神さま出はて来て、

「この間はお陰さんで、神社ええく作でもらて、
本当ありがどさんでしたは。そ

のお札に、明日の八卦教へつさげあえ、ええぐ聞げ。あの娘あ、本当あ病氣なのねあなだ。むがしあの家建でつ時、今娘あ寝つた部屋の下さ、蛇あ埋めらつてあだ。ほの蛇あ何も悪あごどしねな、そこにいだばりで殺さつて埋めらつたはげあえ、ほれ残念で、今あの娘あどさ祟つたあだ。んだはげあえ、ほれ掘て、別んどさ埋めで、蛇塚作くて、供養してやれば娘あ医者さなのかがらねたて、そんな治んなだ」

ていうど、神さま見ねあぐなてしまたけどは。

ほんでほの人あ次の日長者家さ行て、まだ真面目顔して、八卦おく真似して、「ううん。これは蛇の祟りだ。何も悪ごどしねあ蛇あ、ここの家の人達に殺さつたよだ。ほんでほの蛇あ祟つたなだ。んだはげあえ、ほれあ娘さんの寝つた、部屋の下さ埋めらつてだはげあえ、ほれ掘て、別んどさ蛇塚作で供養すつど、ほの病氣あ直ぐ治る」

て、神さまに教へらつた通りん言たど。ほしたば、長者あ、すぐ娘別の部屋さ移して、板敷の下掘て見だど。ほしたば、やつぱり蛇の骨こあ出はてきたけど。

ほんで長者あ、ほの人に言わ^ゆつだ通りん、ほの骨こ別んどさ埋めで、蛇塚作て、丁寧ま^つつたど。

ほしたば、娘あそんまえぐなたけどは。ほうして、長者まだ、ほの人に一度ならず二度も助けら^つで、本^{ほん}当^{とう}ありがであ^つた。ほういう立^り派^はだ人^{ひと}だば、俺あ家の娘の智^ちんしねあんねあ。てほの人に智^ちんなてもらて、幸^{しつやわへ}福^ふん暮^くしたけど。とんぴん からんこあ ねあ^つけどは。

(話者 舟生カネヨ)

8 なら 梨ぬぎ

むがしあ^つたけど。

むがしなあ、あるどさ、爺さまど婆さまいであ^つたど。ほうしてなあ、太郎ど次郎ど三郎ていう三人の子供あいであ^つたど。爺さまど婆さまあ、一生懸命ん働

れあで、三人さ赤あえ魚こで飯食へで、うんと大したけど。

野郎達あ十五、六もなた頃、爺さまど婆さまあ、

「なら梨食であ。なら梨食であ」

て、毎日いうけど。んであ、ほんげあえいうおんだおん。もえできて食へねあんねあんだな。てもぎん行ぐごどんなて、太郎あ、にぎり飯にきてもらて、ほれはげごさ入で、ほれ背負てもぎん行たど。

ほうして、太郎あずうつと行たば、茶屋あつけど。ほごで一服つけつだば、茶屋の婆さまあ、

「どさ行ぐごこだや」

て聞ぐけど。ほんで太郎あ、

「俺あ家の爺さまど婆さまあ、あんまりならの梨食であていうおんださげあえ、ならの梨もぎん行ぐごこだ」

て言たど。ほしたば、婆さまあ、

「それあええども、ならの梨もぎん行くなもええども、これがら少し行ぐど、ど

んどんど流つでる滝ああっさげあえ、ほごで、滝あ、戻れどんどん、戻れどんどんという時つぎあ、なんだごどしたて戻れよ。ほうして、行えげどんどん、行えげどんどんという時あ行えげばえ」

て教おへだど。

ほうして、太郎あ行たべ。ずっと行たば、やつぱり滝ああっけど。ほんでだまつて聞つだば、滝あ、行えげどんどん、行えげどんどんというども、戻れどんどん、戻れどんどんてゆわねあけど。ほんで太郎あ、ずうつと行たど。

ほうして行たばなあ、ならの梨ぬぎああつて、ほれさ梨あ、ほれしこであまこそ沢山、取りたであならねあくれあなてだけど。太郎あ、これあえがもつたど思て、一生懸命もえで、えっぺあもえでは、こんだ帰けあえらねあんねあなど思て、もえだ梨、はげごさ入へで、行えぐがなど思たども、晩方なて、薄暗ぐれあくなたおんださげあえ、仕方ね、ほの梨ぬぎの枝さ泊まて、だんまていたど。

ほうして、暗くなたんだし、山ん中だべ。んだおんださげあえ、何が化物おのでも出はて来るんねあべがど思て、びぐびぐしていたど。ほんでも、何にも出はて来

るふんねあけど。

ほうしてるうづん、だんだん夜中んなたべ。ほうしたば、かさつ。ぱちん。て、木の葉なの、木の枝こなの踏む音あ、こつつさ来るずおん。ほうして、梨ぬぎの下さ来て、

「太郎。お前んすあ、何すん来たや」

ていうけど。太郎あ、これこそ化物だな、と思たら、恐おかねあぐなてしまて、後引込うしろしこみ引込だど。なんぼ引込でも、みつか、かつらど上て来んなだけどやあ。ほのうづん太郎あ、化物にぺろつと飲したつまつでしまたけどは。

家の人達したつあ、太郎あ来ねあどて、うんと心配すんべあして待つっだども、なんぼしたて来ねずおんは。

あんまり太郎あ来ねあおんだはげあえ、次郎あ、

「兄あんっあさん、何してるおんだべ。あんまり来ねあはげあえ、俺あ行てみる」

て、にぎり飯にきてもらて、今度あ次郎あ行たど。

ほうして、ずつと行たば、やつぱり茶屋あつけど。次郎も茶屋さ休すだば、茶

屋の婆さまあ、

「次郎さん次郎さん。今度あお前行くなが」

て聞ぐけど。ほんで次郎あ、

「んだあ。俺も梨もぎえぐなだ」て言たば、

「ほう、んだが。ところで太郎あ帰えて来たがや」て聞ぐけど。

「太郎兄んつあ、なんぼしたて戻て来ねあなよ。んだはげあえ、さがしながら行くなだ」

て言たば、茶屋の婆さまあ、

「次郎さん次郎さん。お前も氣つけねあばでねあんだぜえあ、ほうして、滝んどさ行て、滝あ、行げんどんどん、行げんどんどんて言た時あ行げばえし、戻れんどん、戻れんどんどんて言た時あ戻らねあんねあぞ」

て教えでやたど。ほんで次郎あ、ずっと行たど。ほしたば、やっぱり滝んどさ行たけど。ほして滝あ、

「行げんどんどん、行げんどんどん」

てばり言^ゆて、戻れんどん^ゆて言わねあけど。ほんで次郎あ行たど。

ほうして行たば、ならの梨ぬぎあ^あて、梨あえつ^あへあ^あな^あてで、次郎あ背負えねあくれあもえだど。んでも、まだ晩方な^あて、暗ぐ^あなら^あったおんだはげあえ、次郎あ、ほの梨ぬぎさ泊^あまたど。次郎も何が来^あつがど思^あて、おかねあ^あくていだども、なんにも来ねあけど。

「なんにも来ねあ^あであ」ど思^あていたど。

ほうして、夜中んな^あたば、なんだが、かさらつ、かさらつていう音あ^あすつずおんや。ほうして、

「この前^{めあえ}、太郎あ^あ来^あた^あけあ、今度だ次郎お前^{んす}が」

て、化物あ^あ出^あは^あて来^あた^あけどやあ。次郎あ、おかねあ^あくて、おかねあ^あくて、ぶるぶるとふるえ^あつだどは。ほのうづん化物あ、次郎あどごも、ぺろつと飲^あで^あしま^あた^あけどは。

家の人達あ、次郎も、なんした^あて来^あねあ^あお^あんだし、なん^あずしたお^あんだべど思^あて、困^あて困^あてい^あだ^あずお^あん^あは^あや。

ほんで、今度あ、末の三郎あ、

「なんだて、俺あ家の兄つあだ、役立たねあおんだ。二人ながらどき泊まてるおんだが、音も沙汰もねあぐなたおんだ。今度あ、俺あ行てさがして来る。」

つけど。んでも、爺さまど婆さまあ心配して、

「ええさげあえ、行くなは」

て言たども、三郎あきがねあで、にぎり飯にきてもらて、はげごさ入で、野越え山越え、ずっと行たべちや。ほうして、三郎も茶屋んどさ行たば、茶屋の婆さまあ、

「三郎さん三郎さん。お前どさ行くや」

ていうけど。ほんで三郎あ、

「俺あ家の兄つあだあ、梨もぎ行て、ほのまま帰えて来ねあはげあえ、何しつたおんだが、見ん来たあだ」て言たば、

「ほう。ないなおんだがなや。ほれあ心配だごつたな。んでも、お前も気づけねあんねあんだぜえあや」

て、心配してくつで、

「ほれがらなあ、もう少す行くど滝ああつさげあえ、滝あ戻れんどんどん、戻れんどんどんという時あ、なんとごどしたて戻らねあんねあぞ。ほうして行げんどんどん、行げんどんどんという時あ行げばえしな」

て教へらつで、ずっと行たば、やつぱり滝ああつけど。

ほんでほごで、だまつて聞つたば、行げんどんどん、行げんどんどんて言て、戻れんどんどんて言わねあずおん。ほんでずっと行たば、ならの梨ぬ木ああつけど。ほうして、ほれこそえつぺあなてだけど。ほんでほの梨、はけこそえつぺあもえだど。ほうして、ほのうづ暗くなてしまたけどは。

「ああ、暗れあぐなてしまたは。これだば家さ帰えらんねは。こさ泊まてえがねあんねべちやや」

て、ほの梨ぬ木さ泊まて、だんまていだどは。ほうして、夜中んなたば、暗闇くらすみがら、何が来た音あすつずおん。ほうして、

「三郎。今度あお前来たなが。んであ、三人、みな来たなが」

つけど。三郎あ、

「んだ。今度あ俺あ来た」

て言^ゆたども、恐^おねあぐなてきたけど。ほんでも家がら刀持てきたおんださげあえ、
「畜生、こつちやなの来てみる。ぶった切^きてくえつさげあえ」ど思ていだど。ほ
したば、化物あ、

「ああ、んだがんだが。どごいだどごいだ」

て、手と足突き出してよごしたけど。ほうすつど三郎あ、こん時だど思て、持
てきた刀で、化物の手ど足、だぎつ、だぎつと切つたど。ほうしたば、どだつて
いう音あして、下さ落ちだ音あすつけど。ほうして、

「ああ痛でー、ああ痛でー」て、おえおえて泣ぐけど。ほうして、

「あんた野郎^{やろ}こに切らつたはあ。痛では、痛では」

て泣えつただけどは。真暗だおんだはげあえ、なんだ化物だか分らねあけど。ほ
んで三郎あ、早ぐ夜あ明げでくえればえど思て待ちつたど。

ほうしてゐるうづん、だんだん夜あ明げだべ。ほんで明りぐなつど、ほの梨ぬ木

がら下りで見だば、ほれこそすこであま大つき猪むづなだけど。

三郎あ下りで行たば、猪あ、

「三郎さん三郎さん。まず、どうが命ばりも助けてころ。まず、お前にこの通り手足もがつでしまたは。んだはげあえ、どうが助けてころ」

どて、ぼろぼろど涙こぼすけど。三郎あ、

「このえぐなし畜生ちきしよあ、ろぐだごどしねあはげあえ、ほゆおんだ。ざんまみろ。

憎ぐえ畜生だ。俺あ家の兄つあだどご、どごさやた。出たねあば、ぶった切て、殺してくえんぞ。早ぐ出へ、この畜生あ」

て言たば、ほの猪あ、片方かたつぽの鼻くえで、ふうんてしたば、太郎あ出はてきたけ

ど。まだ片方の鼻ふうんつたば、今度あ次郎あ出はてきたけど。

「この畜生あ、ろぐんねあ畜生だ。俺あ家の兄つあだどご飲みあがて」

ていうど、泣ねだり、痛であがて、うーうてうなんなば、三人でぐるぐるどふん縛すば

りづげで、今度あ、ほごらあだりから、棒みつけできて、ほの棒足さ通して、担かつで家さ来たど。

ほうしたば、爺さまど婆さまあ、たまげでたまげで、

「こういうごどもあるおんだがや。まず、たまげだごども
どていだけど。」

ほうして、ならの梨も、えっぺあ食て、喜で、

「まず、えがったえがった。三郎もえぐ仇とてきてくつだ。」
て、うんと喜でだけど。

ほうしてゐるうづん、村の人達も話聞で、皆集ばて来て、ほの大つき貉見で、たまげては、大さわぎだけど。ほうして、貉あ、たあだ、皆に貉汁して食^かつでしま
たけどは。とんびん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋タケヨ)

9 どうもこうも

むがしあつたけど。

こごらあだりだば、新庄みであんた町さ、医者二人^{したり}いだけど。ほうして、ほの医者達^だあとも上手^{じょん}だ医者で、どちあどちどもゆわんねあくれあ上手だ医者達^だだけど。ほうして、一人あどうもていう医者で、もう一人あこうもていう医者であつたど。

二人あ上手だおんで、まず、指もえだて言^ゆえば、指ちゃんとかつつげでくえんべし、足もえだて言^ゆえば、足くつつげでくえるし、首切らつだていうど、首せあもくつつげでくえなくれあの名医であつたどや。

ほんで手怪我^ゆしたていうど、んだらほれ、新庄のどうもさ行げ。足折^ゆたて言^ゆえば、ほんであ、こうもさ行げていうなで、流行て流行て、しつしやましくれあ流行^ゆつがったど。

ある時、及^{のぞぎ}位の百姓あ、秋田の殿さま行列^ゆつくて来たな氣あつかねあで、ほの

行列の前横切めあえぎてしまたど。ほうすつど、お伴の武士さむれあに、

「ど百姓の分際で、殿さまの行列の前横切めあえぎったな」

ていうど、いぎなりすぱつと首切らつてしまたけど。ほうすつど、家の人達したずあ父親首切らつてしまたどて、つあつあどさ抱たぐづで泣ねっただけどは。ほしたば、村の人達あ、

「んであ、新庄のこうもさ連つで行げ」

ていうなで、皆して戸板さのへで、新庄のこうもさ連つで行たど。

ほしたば、こうもあ、

「これあ丁度えあんべあだ。どうもあ、この首なんぼ上手んくつげつが、くつづけらへてみねあんねあ」

ていうなで、ほの死人どうもさ連で行たど。ほうして、どうもさ、

「この首くつつげてみる」

て言ゆたど。ほしたば、どうもあ、「んだがつ」ていうど、ほの首、えあんべあ載えがへで、一生懸命縫ぬいて、そんま生えがしたけどは。

ほれ見つどころもあ、どうもなのくつつげんねあべと思^もた首くつつげだべ。自分^{おわ}ぐれ上手だ医者いねあど思^もたな、どうもあ立派んくつつげだべ。んだおんだんだはげあえ、いまいましくてしようあねあがったど。ほんで何時がどうもあどさ、なんとがして一泡ふがへねあんねあど思^もていであつたど。

ある時、こうもあ、萩野の百姓やがら、大怪我したはげあえ、大至急来てもらいであていう使いあ来^もたけど。ほうして馬さのへらつて行^もてみだば、ほこの家の親父あ、押切で手もえでうなていだあ^もだけど。ほんでこうもあ、ほれくつつげで、縫^もて治^もしてくつだけど。ほんでえが^もったどて、うんと喜^もばつて、すこであま御馳走^もなて、ええ機嫌なて、馬で送^もらつて来^もたど。

ほうして、大分^{であぶ}来^もたば、仕置場で罪人^{けあ}が二人、首切らつてだどごだけど。ほんでほの首切られんな見^もでがら、家さ帰^もえたど。ほうして、一人で、

「あつ、んだ」

て叫^もんだけど。

ほうして、次の日、こうもあ、医者^{たが}の道具持^もて、どうもあ家^もさ行^もたけど。ほう

して、どうもあどさ、

「どつつあ上手だが、腕くらべすんべや」

て言^ゆたど。ほんで、どうもあ、

「なんだごとしてや」

て聞^きいだら、こうもあ、

「二人あ一緒^{したり}に首切^して、自分首くつつけるごとすんべ」

て言^ゆたど。ほんでどうもあ、

「ほんた馬鹿くせあごど出来^けるおんでねあ。ほんたごど俺^やあ嫌^やだ」

ていうけど。ほんでも、こうもあきがねあで、

「名医だば、ほのくれあのごどあ出来^げるんだはげあえ、まず、すんべ」

て聞^きがねあけど。どうもあ、なんぼ嫌^やだて言^ゆたて、こうもあ、するどてきがねあ
おんださげあえ、とうどうしめあえにあ、どうもあ負けで、するごどんしたど。

ほうして二人あ一緒^{したり}ん首切^したべ。ほうすつど首^{まなく}あ転^てでえたべ。手あ拾^{ひろ}うかん
じよしたべ。んだて、手さ眼^{まなく}あつでねあべ、んだおんださげあえ、拾^{ひろ}うもなに

も出来るおんでねあんだはげあえなや。ほんでとうどう二人あほのまま死んでしまて、どうもこうも出来ねあぐなてしまたけどは。

んだはげあえ、ほんた馬鹿だごどするおんでねあおんだど。どうもこうもてい
うな、ほれがら言うよんなたあだど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋久米次郎)

10 鴨どんじよ話

むがしあつたけど。

むがしなあ、塩根川しよねの中小屋なかじやさ、とでも鉄砲ぶちの好すぎだ爺ずさまいだけど。ほの
爺おやさまあ、暇ひませあもあつど鉄砲たがて出がげであ、雉打むすなてきたり、貉むすなだどが、兎
だどがて、さまさまの獣捕つぎてくつがったど。

ある時つぎ、川さ鴨あ下りだけど。ほうすつど爺おやさまあ田の仕事すこじぶんなげで、家えさ

走して行^えたど。ほうして、家から鉄砲持て来て、一羽見んなさめがげで、ぼえんと打^ぶたど。ほれ打たていうど、田の中さ鉄砲ぶなげで、川さ走して行てみだど。ほうしたば、一羽ばりんねあ、五、六羽もぶだつでだけど。ほんで爺さまあ、ほこほこて喜で、ほれ縄で首^{くび}つねあで、担^{かつ}で鉄砲持ちん来たど。

ほしたば、田の泥水ん中さ鉄砲あ漬^つかていだけど。

「あらあらつ。これあ大事^{おおじ}したちやは」

ど思^もて、ほの鉄砲拾ろたど。ほんで爺さまあ、どでして拾ろて見だど。ほしたば、鉄砲ん中さ、どんじよあ五、六升もあるくれあ入^あつたけど。ほんで爺さまあ喜で、

「これあええもんだ。鴨一羽打たばんで、鴨あ五、六羽も捕つで、ほの外んどんじよあ五、六升もかがて、こんげあええごどあねあおんだ」

て、ほこほこて喜では、田の中走^うてありぐけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

11 和尚と小僧

むがしあつたけど。

あるどさなあ、お寺あつけど。ほうしてなあ、ほの寺さ、和尚さんど小僧^{こんぞ}こあ二人^{したり}いであつたど。

ほうしてなあ、ほの和尚さんずあしぴたれで、葬式だ、法事だなていうど、ほれ、ほごの家^えがらお包みもらうべ。ほうすつど、ほのもらた御馳走^{ごちそう}、戸棚^へさ入でおえで、夜んま小僧こあだ寝でがら、自分^{おわ}一人ばりして食て、小僧こあだどさなの、さつぱり食^かへねああだけど。んだはげあえ、仕方ねあ、小僧こあだ、和尚さん法事さなの招^{よば}つでえて、いねあぐなたつていうど、戸棚さがして、盗み食^くいすんなだけど。

んでも、盗み食いすつど分るおんではげあえ、戸棚の戸開げでおえで、鼠^{へあ}あ入んなみでで、戸閉めで、鼠あどご戸棚の中^へさ入でおぐなだけど。

ほうすつど、和尚さん帰えて来て、戸棚の戸開げつど、鼠あ、ぼえら出はてく

んべ。ほうすつど和尚さん、

「あらつ、まだ鼠^{へあ}あ入^あたちやは、んであ、まだ食^かつたは」
ていつがつたど。

ある時、和尚さん、檀家がら甘酒もらて、戸棚の瓶こさ入^へで、さつぱり小僧こあ
ださ飲まへねあけど。ほんで小僧あだ、夜んまこつそり隙見してみつだば、和尚
さん、ほの甘酒、囲炉裏さ、鍋かげで、温めで、自分ばり、んめあそんして飲で
だけど。

次の日、和尚さん、檀家の法事さ招ばつで、出はて行^えたど。ほうすつど、小僧^{こんで}こ
だ、あのんめあ甘酒、今日こそ飲んでくんねあんねあど思^もていだど。んでも、和
尚さん出はて行く時、

「小僧小僧。戸棚の瓶こさ、白え水^{へあ}あ入^あつたども、あれあ、あんまり鼠^{ねあ}あ戸棚さ
入て、戸棚の物食^{おの}うはげあえ、鼠殺すべ^もと思^へて毒入^おつたなだはげあえ、恐^おねあは
げあえ、飲^ゆだりしてあ駄目だぞ」

て言^ゆて行^ゆたけど。

んだて、小僧こあだ、甘酒だて覺おべつだべ。んだおんださげあえ、ほの瓶こ、戸棚がら出して、先ず一口飲でみだど。ほしたば、とでもんめあずおんや。んだおんださげあえ、もう一口飲でみだど。んだて腹痛であぐならねあべ。んだおんださげあえ、もう一口、もう一口て、みな飲でしまたけどは。

ほうして、飲でしまてがら、小僧こあだ、

「ああ、みな飲でしまたは、困たちや困たちや」

ていだけど。

んだて、みな飲でがらだば、なんずもしよあねあんだし、先ず、瓶こ戸棚さ入へで、二人したりして考えだど。ほうして、和尚さん帰えて来んな待ちつだど。

ほうしてゐるうづん、暗ぐなて、和尚さ帰えて来たけど。ほうして、帰えて来つど直ぐ、戸棚の戸開げで、瓶こ見っただけど。ほしたば、ほれ、小僧こあだみな飲でしまたおんだおん。甘酒あなのさっぱり入あてねあべ。ほうすつど和尚さん怒こゝろあで、

「小僧小僧。この瓶こさ入あつた甘酒みな飲でしまたなつ」

つけど。ほんで小僧こあだ、

「ほういうおの、俺^{おら}知らねあな」

て、知らねあふりしつたど。ほしたば和尚さん、

「知らねあじゅあねあべな。んであなしてなくなた」

ていうけど。ほんで小僧こあだ、

「んだて和尚さん、鼠殺す毒だけあえ飲むなて言^ゆたべ。ほだおんださげあえ、俺^{おか}達恐ねあくて、見もしねあんだはげあえ。」

て、どこまでも知らねあふりしたば、

「んだら、なえだてなぐなた。あんげあええつぺあ、鼠^ねの飲めるおんでねあべな」

ていうけど。ほんで小僧こあだ、

「ほう言^ゆえば、なんだが、本堂の方で、がだらがだらて音あすつけあ、お釈迦さまのどあ乾あえで、ほの甘酒飲でえたなんねあべが」

て言^ゆたど。ほうすつど和尚さん、

「んだが、んであ、お釈迦さまき聞で来んべ」

ていうど、本堂さ行で、木魚ただぐ棒持^{たが}て、

「お釈迦さんお釈迦さん。戸棚の甘酒飲みあした^が」

て言^ゆいながら、お釈迦さんどご、ほの棒でただえだど。ほしたば、唐金^{からがね}で作た
お釈迦さまあ、「かあん、かあん」ていうけど。ほんで和尚さん、

「本^{ほん}当^{とん}食ねあですべな」

ていうど、まだただえだど。ほうしたば、まだ、「かあん、かあん」て、お釈迦
さまいうおんだはげあえ、和尚さん、

「ほれみろ。お釈迦さまなの、かねあかねあていうんねあ^が」

ていうおんださげあえ、小僧こあだ、

「いや。お釈迦さまにちげあえねあ。足音あ、本堂の方^がら、和尚さんの室の方
さ来た音だけおん」

て言^ゆたべ。ほうすつど和尚さん、

「んだが、んであ、ただえでも駄目^だだば、煮で聞でみんべ」

ていうど。台所^{だいじょ}さ大鍋かげで、水えっぺあ入^いで、ほれさお釈迦さまどご入^いつで

煮だど。ほのうづん、お釈迦さま煮^ねえてきて、

「くった、くった、くった、くった」

というけど。ほんで和尚さん、

「ははあ、やつぱり食ったが。お釈迦さんだば、これあなんともしようねな」

というけど。ほんで小僧^{こしや}こあだ叱^{こしや}がんねあがつたど。とんぴん からんこあ
ねあつけどは。

(話者 舟生カネヨ)

12 木のまった

むがしあつたけど。

むがしあなあ、なんだ人^{しと}だて六十なつど木の股^{また}だていうもんで、六十な^{としよ}た年寄
りば山奥さ連^つで行て、木の股さ置えでくんなであつたど。

ほればりんねあ、おぼごあ余り生れつど、穀^{こく}つぶしだて、貧乏^えだ家^えでなの、飯食^{まま}んねあぐなるどて、殺^んして埋^んめでしまうなも、えつぺあいつがつたど。

んだはげあえ、年寄りあ六十もなつど、働^んげねあぐなて、飯^んばり食て、穀^んつぶしだはげあえ、木の股^{もも}んしたんもんだど。

んでも、ある若^わ者^ああ、親^{おや}爺^ぢさまあ六十なたはげあえ、まず仕方ねあ、村の人あ

見^みてる昼間、親^{おや}爺^ぢさまどご背負^{せお}て山^{やま}さ行^いたど。ほうして、萱^{あし}で小屋^{こや}かげで、藁^{わら}敷^{しき}で、寒^{さむ}ぐねあよんどんぶぐなの着^きへで、夜^よんま迎^{むか}げあえん来^きつさげあえな、てにぎり飯^い置^まえで来^きたけど。

親^{おや}だおの、俺^{おれ}あどご難^{がた}儀^ぎして育^{そだ}てでくつで、分^わらねあごどあ何^{なん}でも教^{おし}へでもらたあだおの、いだましくて、むぞせあくて、とても山^{やま}さなの捨^すてておがんねあ。て、今^{こん}度^だあ、夜^よんま、こつそり迎^{むか}げあえん行^いて、爺^{おや}さまどご背負^{せお}て自分^{おのれ}家^{いえ}さ連^{れん}で、奥^{おく}の座敷^{ざしき}さ置^おえで、

「人^{ひと}に見^みえつどえぐねあはげあえ、こから出^ではんなよ」
て言^いて、大^{だい}事^じんして暮^くしつたけど。

ほうしていだば、隣りの国の殿さまがら、自分達方の殿さまどき、丸太一本よごして、この丸太の梢うしろどつつだが、元あどつつだが、印つけでよこへて来たけど。ほれあ、こつつの国に、智恵者いるがなんだが、調べであがったあだど。

ほんで殿さまあ、家来達皆集あつんで、

「隣りの国がら、この丸太の梢ど元あどつつだが、教へでよこへて言ゆてきた。これあこの国に智恵のある者あいだがあなたが調べて、いねあば攻めで来て、この国取てしまう考かんげあえだはげあえ、なんずしてもはつきり教へでやらねあんねあ。お前達はどうだ。分る者あいねあが」

て聞だども、誰も覚おぼつた者あいねあくて、皆頭下げで、何にもいう者あいねあがったど。

ほんで殿さま困て、

「それでは、国中に触れを出せ。ほうして、分る者あいだら、なるだけ早く連つでこえ。こういう事はぐづぐづしてつど駄目だ」

て、国中さ、早馬で触れ出したど。

ほの若者もほの触れがぎ見だども分らねあけど。んでも、これあ大変だ。まず、早く爺さまどき聞でみねあんねあ。て走して行て、爺さまどさしやべたど。ほしたば、爺さまあ、

「ほんたごどあ雑作^{じようさく}ねあごつた。元^{もと}の方あ重であえおんだ。んだはげあえ、静がん水さ入^へつど、元の方あ沈^{すず}で行くおんだ」

て教へだけど。ほれ聞ぐど、若者あ、直ぐ代官所さふつとで行て、俺^{おへ}あ覺つた言^ゆたど。爺さま六十過ぎだあだはげあえ、爺さまどから聞だていうど、罪んなるおんだはげあえ、俺あ覺つだて言^ゆたあだど。

代官さまあ、ほれ聞ぐど、若者馬さのへで、自分も馬さのて、お城さ走して連^つで行たど。ほうして、殿さまさ申し上げたば、

「そんなら、早速、この丸太の梢ど元教へろ」

つけど。ほんで若者あ、

「お堀の水さ、静がん、この丸太入つてみて下だせあ」

て言^ゆたど。ほんで殿さまあ、家来^だ達あどさ、丸太運ばへで、お堀の水さ静かん

入らへだど。ほしたば、片方かたつばあ沈おんなでえたけど。ほうすつど若者あ、殿さまさ、

「木は元も梢も同じでも、元の方あ年こあくつてつさげあえ、重であえおんです。んだはげあえ、沈んだ方あ元です」

て、爺さまがら聞だとおりに言ゆたど。ほしたば殿さま喜で、えつぺあごほうびくつだけど。

ほれがら、又暫ぐすつど、隣りの国がら、今度あ、灰でなた縄よごへ。それも十日の間えあたん作こしえでよごへ、て言ゆてよごしたあだど。殿さまあ困て、家来達集だべで聞だども、分らねあけど。ほんでまだ国中さ触れ出したど。

若者あまだほれ見で、

「爺さま爺さま。今度あ灰でなた縄よごへて来たど。なんずんしたら、灰でなの縄なうえおんだべ」

て聞だど。ほしたば、爺さまあ、

「ほれあなあ、まず、先ん縄なてで、濃え塩水しっしょかげで、こんだほれ乾がして焼げ」

て教へただけど。ほんで若者あ、早速教へらっだ通りんしてみだど。ほしたば、親爺さま言ゆた通り、なたままの灰の縄出来げだけど。

ほんでほれ箱へさ入で、代官さまさ持て行たば、まだ、お城さほれ持て連で行て、殿さま見へだば、殿さまあ、

「なるほど、これあえぐ出来だ。えがったえがった」

て喜で賞めでくつで、まだ、えつぺあごほうびくつだけど。

ほうして、まだ暫ぐおもたら、まだ、隣りの国がら、今度あ、曲りくねた、細え穴ええあつだ水晶の玉よごして、これさ糸通してよごへて来たど。七月のうづんねば駄目だゆてよごしたあだど。

なんぼほの玉見だて通へそんねあし、通すべど思たて、穴曲てるおんだはげあえ、糸なの通らねあけど。殿さま困てしまて、まだ国中さ触れ出したど。

若者あ、ほれ見つど、まだ爺どさ来たど。ほしたば爺さまあ、

「山蟻捕しめあで来え。ほしてほの蟻の足さ、絹糸つねあで、出口の穴んどさ、蜂蜜ぬて、反対の穴がら蟻押し込こでやれ。ほうすつど、蟻あ蜂蜜の匂えけあで通つてえ

ぐはげあえ」

て教へただけ。

ほんで若者あ、「俺あ覚でいあす」て、代官さまさ行たど。ほんで代官さま、まだ殿さまどさ連で行たど。ほしたば殿さまあ、

「どうして、これに糸を通すんだ」

て、ほの水晶の玉見へただけ。ほんで若者あ、

「まず、山蟻一匹ど、蜂蜜ど、絹糸用意して下せあ」

て頼だど。ほんで殿さまあ、早速ほれ持て来^こらへだど。

ほんで若者あ、玉借りで、片方の穴さ蜂蜜塗て、蟻の足さ絹糸ゆつつげで、蜜塗らねあ方の穴さ、蟻あどご押し込でやたど。ほしたば、蟻あ、爺さま言^ゆたとおり、もそもそど穴くぐて行て、絹糸通したけど。

殿さまあ、たまげで見っただけど。ほうして、やつぱり智恵あねあど駄目だ。戦だて同じだ、俺の国にもこげあえた智恵のある者あいであつたが。んであ、俺の国も大丈夫だ。て、大した喜で、

「お前は三度も国を救ってくれた智恵者だ。何でもほうびのものをとらす。望みのものをいってみろ」

て、殿さま言^ゆたど。ほうしたば、若者あ、

「私^{わたくし}はほうびなの、なんにもいりあへん。ただ、殿さまの命令を犯した罪せあも、許してもらえばえげあえす」

て言^ゆたど。ほんで殿さまあ、不思議に思て、

「その罪というは、どういう罪だ」

て聞^きだど。ほんで若者あ、

「実^{じつ}は、私には六十になた親爺さまいだあです。私はその親に、難儀して育でもらいあしたし、知らねあごどあ、みな親がら聞^いて一人前^{いちぜん}にしてもらいあした。

んでも、親より智恵あ足んねくて、この度の三つの難題も、実は私の智恵で解えだおんねあくて、木の股さ置がねあで、家さかぐした親に教へでもらたおのばりです。ほういう訳で、私は六十なた年寄り、かぐした罪許してもらて、親を家さ置がへでもらて、一緒ん暮さへでもらええ、それでええなです。この度の手

柄で、どうか私を許して下さい」

て、手つえで殿さまさ頼だど。ほうしたば、殿さまも、あの若者の親だご思う心にくだれで、涙流したけど。ほうして、

「お前は思いきって、余の悪がったごどをよぐ言ってくれた。お前の親孝行には余も頭の下がる思いがする。お前の罪は罪ではない。余の悪政で、老人がこの世の中に、こんなによい智恵を出してくれで、国を救ってくれたごどで、余の目が覚めだようだ。早速六十の木の股は止めるごどにする。」

て、殿さま喜で喜で、若者さほれごそえつぺあごほうびくつで、ほれがらは木の股ねあぐして、年寄り大事んする。て触れ出したけど。とんぴん からんこあねあつけど。

（話者 高橋福松）

13 姥 捨 山

むがしあつたけど。

むがしあなあ、年寄りずあ、唯いで飯まばり食つてんべし、ほれさよぼよぼて、もうろぐつげげんなもいんべし、飯こぼしたり、お汁つげこぼしたり、中にあ、小便しょうべくそ糞も一人で出来げねあぐなて、まずべし、めくせあおんだはげあえ、六十んなつど、姥捨山だどが、木の股まただどがて、山さ捨てできたおんだど。

ほういうむがしんなあ、ある男人おとこしとあ、自分家の親婆さまあ六十んなたおんださげあえ、山さ捨てで来ねあんねあぐなて、仕方ねあ山さ背負て捨てん行たど。

ほうして、太分行であぶたば、ばきんばきんていう音あすつおん。ほんでほの人あ、婆さまあおがし音さへるおんだど思もて、

「婆さま婆さま。なにしつたや」て聞だど。ほしたば、

「木の枝折つたあだ」

ていうけど。ほんで、

「木の枝なの折て、何するおんだや」

て聞だば、婆さまあ、

「お前^{めあけあ}帰えりしめあん、道分らねあぐなつどえぐねあはげあえ、曲り角どが、分れ道んどごなの枝折て、印つけで来たはげあえ、帰えりしめあんほれ見で行げ。間違うごどあねあぐ帰えれつさげあえな」

ていうけどやあ、ほんでほの人あたまげで、

「今、自分^{おわ}山さ捨てらつで、食うおのもねあぐなて死ぬばりん時、息子あ道さ迷わねあで帰えられるよんしてくえるなて、親んねあば出来^げるごどんねあ。親、こんげあえ俺あどご思てくえつ時^{つぎ}、ほの親俺あ山さ捨てん行ぐなて、ほんた間違てるごど、俺あされるおんでねあ」

ど思^もたら、泣けで泣げで、涙止まらねあけどは。ほしたば、婆さまあ、

「泣ぐな泣ぐな。泣がねあたてえ。さあ行ぐべ」

つけど。ほしたば、息子あ、

「婆さまどごあんまり有難であくて、むぞせあくて、山さ置えでなの、俺あとで

も帰えらんねあ。家さ行くべは。家さ連で行て、今まで馬鹿でしねあがった親孝行、俺もしてみであぐなた。これがら俺あ大事んすっさげあえな婆さま。んだはげあえ、家さ行くべはや」

て言^ゆたけど。ほしたば婆さまあ、

「ええ、え、俺あ家さ行たて、何にも出来るわけ^げんねあ、返てお前達の手足^{けあ}までいんなるばんだし、ほれさ、年寄りあ六十なつど山さ捨てろていうな国の掟^{おぎ}でだべ。んだはげあえ、俺あどごなの家さ連で行たら、ほれこそ、殿さまにお前叱^{ごしや}がえるばんだべ。んだはげあえ、ええはげあえ、山さ置えで行げ」

て、あぐまでも息子あどごかばうなだけど。ほんで息子あ、

「奥の座敷さ置くはげあえ、外さ出はて、人ん見つけらんねあよん、奥の座敷にいだらえがべ。んだはげあえ、帰えて、俺ど一緒ん暮すべ。ほうへば、誰にも見つけらんねあんだおん。若し、見つけらつた時あ仕方ねあ、ほん時あほれまでの寿命だと思えばえんだおん。俺あなんずしたて、婆さまどご山さなの置えで行げねあ」

て、婆さまあどご背負て、家さ戻て、婆さまどご大事んして暮しったけど。

ほうして暮してるうづん、殿さまどから、国中さ触あ廻わたけど。ほれあまだ、

「七節ある竹さ開っだ細え穴さ、糸通へる者あいねあが」

ていうお触だけど。

ほれあまだ、隣りの国の殿さま言てよごした難題だけど。ほうして、ほの問題
解けねあば、お前の国取てしまうて言てよごしたあだど。ほんで殿さま困てしま
て、国中さ触出して、

「分る者さごほうびくえっさげあえ、分る者あ教へろ」
て書えっだあだけど。

ほんでほの人あ、うんと考げあだども分らねあけど。ほうして、

「これだば、俺なの分らねあ、婆さまどさ聞でみねあんねあ」

ていうなで、婆さまどさ行て、

「七節ある竹の節さ開っだ、細え穴さ糸通してやんな、分る者あ教へろて、国中
さ触出してよごしたなよ。なんずんしたらええおんだべ」

て聞だど。ほしたば婆さまあ、

「ほつがほつが。ほれあなあ、蟻の大つきな捕しめできて、蟻の足さ糸つねあで、竹の一番上いづさ砂糖置えで、下さ蟻放ゆえしてみろ。ほうすつど、蟻あ砂糖の匂えけあで、ほの砂糖食いであくて、上さ上がて糸通すおんだ」

て教へだけど。ほんで、ほの人あ、直ぐお城さ走して行て、

「殿さま。俺あ覚おべであす」

て言たど。ほしたば、殿ゆさまあ、

「んであ教へろ。なんずするおんだ」

て聞ぐけど。ほんで、

「大つき蟻の足さ糸つねあで、竹の上の方さ砂糖おえで、ほの竹の下さ蟻放すど、蟻あ砂糖の匂えけあで、上の方さ行ぐはげあえ、はげあしてみろ」

て言たど。ほしたば、殿ゆさまあ、

「それあよさそうだ。早速試してみよう」

ていうごどんて、ほの通りしてみだど。ほしたば、蟻あ、んまぐほの穴さ、

糸通したけど。ほんで殿さま喜で、ほの人さ、えっぺあごほうびくっただけど。

ほれがらまだ暫ぐおもうど、まだ、隣りの国の殿さまあ、

「今度あ、灰でなた縄よごへ」

て言てきたけど。ほんで、殿さま分らねあだし、家来達さ聞だて分らねあだし、

まだ、国中さ灰で縄なえる人あいねあが、て触出したど。

ほんでほの男人あ、ほれ聞だども分らねあだし、まだ、婆さまどさ、

「婆さま婆さま。今度あ灰で縄なてよごへて触出してよごしたども、なんずしたら、灰でなの縄なうえおんだべ」

て聞だど。ほしたば、婆さまあ、

「殿さま、まだ、ほんたごどゆてよごしたなが。ほんたおのあ雑作ねあおんだ。

縄さ塩水かけで、乾へたら焼でみる。直ぐ出来つさげあえ」

ほんでほの人あ、早速、縄さ塩水かけで、乾ぐど焼でみだど。ほしたば、縄の形そつくり残したけど。ほんで直ぐ殿さまさ、ほれ持て行て見へだど。ほしたば、殿さまたまげで、

「やあやあ、これはよく出来だ。まづ、なんずして作たおんだ」

て聞くけど。ほんで、ほの人あ、婆さまに教へらつた通り、

「縄さ塩水かげで、乾えでがら焼だなです」

て言たど。ほしたば、殿さまあ、

「そうがそうが。よく出来だ。お前はこんな難しい問題を二度も解いでくれた。んだがら、なんでもお前のええおのをほうびにくえっさげあえ、いってみる」

というけど。ほんでほの人あ、

「ごほうびなの、なんにもいりあへん。俺あ家の婆さままだ、六十なたはげあえ、ほれば姥捨山さやらねあで、家さ置くよんして下せあ。この度の問題したつ二つとも、実は俺あ分らねあくて、婆さまがら聞だあです。こればりんねあぐ、何が分らねあごどああつど、みな婆さまがら聞くなですさげあえ、どうが婆さまどご捨てねあよんお願ゆげあえしあす」

て言たど。ほしたば、殿さま感心して、

「なる程、年寄りよは経験も沢山あるごどだし、見だり聞いだりも余計だべ。お前

がいつてくれたので、よく分った。年寄りを捨てろといったのは、わしが悪がつた。これからは、年寄りも捨てねあで、大事んするごとにする」

て、ほの人さ、うんとごほうびくつで、その親孝行だな賞めだけど。とんぴんからんこあ ねあつけどは。

（話者 高橋三右エ門）

14 化げ猫の恩返し

むがしあつたけど。

むがしあ、よぐ山伏どが、武士どが、坊さんなの、修行のために諸国を廻つて歩いたおんだそうだ。ある時、一人の貧しい坊さんが諸国あを廻て、修行して歩てるうづん、ある村さ来て、夕方暗ぐならつで、村のある家さ泊めどころで行たど。ほこの家であ、見ればみすぼらし格好この坊さんなんだし、

「俺あ家であ泊めれねあども、この村はずれに荒れ寺あつさげあえ、ほごさ行て泊まれ」て言わつたど。

ほんで、村はずれさ行たば、やつぱり見るかげもねあ荒れ寺で、足のふんだで（踏み場）もねあよだ荒れ寺あつけど。んでも、誰も泊めでくえる人もねあんだし、陽あ暮つて、どさも行きどこもねあんだし、まづ、ほごさ一夜の宿を求めたあだど。

ほうして、夜の十二時頃になたば、本堂で、があんて鐘あ鳴たどおもたら、ほのお寺あ、化物屋敷だがなんだが知らねあども、眼のびがびがど光る、針金みであだひげのある山猫だがなんだが、大つきて大つき虎猫あ、本堂のかんげがら出はて来たあだけど。

ここあ荒れ寺だし、淋しごどあ覚悟していだがったども、ほげあた化物なの出るどあ思わねあがった。俺だて腹へてるし、これだてここ棲家にしてれば、誰一人食べ物だて与える者あいねあんだし、ど思て、自分が村がらもらて来たにぎり飯、今夜食うべど思ていだあだども、半分は俺あ食うし、あど半分はお前食え、

て山猫みであだ化猫さ、やたど。

ほしたば、ほの虎猫あ、涙ぼろぼろどこぼして、

「今まで何べんどなく、ここさ泊また人あいだども、誰一人どして俺どさ食べ物なの与えでくつだ者あいねがった。お前のやさし気持あ本当ありがであ。その恩返しに、何時の何日、庄屋の大事だ一人娘あ亡くなて、引導渡す時、お前どさお礼すつさげあえ、その覚悟でいろよ」

というど、夜あ明けできたんだし、ほの化物あ見ねあぐなたけど。

ほうして、ほの坊さん、まだ、「化猫のいうごどだおん、嘘なんだが、本当なんだが分るおんでねあ」ど思ていだど。

ほうして、四、五日暮したば、やつぱり化猫あいった通り、庄屋の娘あ亡くなて、野辺送り来て、今引導渡す時、急に空あ真暗んかぎ曇り、何者がにほの棺箱さらわつでしまて、大騒ぎしたけど。

ほん時、化猫あ荒れ寺さ来て、坊さんどさ、

「俺あ、今、庄屋の娘あ入った棺箱さらて、かぐして来たはげあえ、お前早ぐ行

て、俺ありがたいであお経唱えで、ほの棺箱出してくえるて行げ。ほうして、ナムクラタンノトラヤヤてお経上げろ。ほうすつど、俺あほの棺箱空がら下ろしてよごすはげあえ。ほれで、何事もねあように明るくなるし、今までお前こじぎみであた坊さんでも、位のある和尚に仕立であげられつさげあえな。これあ俺の恩返しだ。んだはげあえ、早く行げ。急がねあば駄目だぞ」

というど、いねあぐなたけどは。

ほんで、ほの坊さんが、急いで庄屋の家さ行てみだば、やっぱり化猫あ言ゆた通り、棺箱さらわつだどて、大騒ぎしつたごだけど。

ほんでほの坊さんが、早速、

「みな騒さわぐな。静しずかにしてころ。今、ありがたいであお経上げて、ほの棺箱出してくえつさげあえ」

というど、線香上げで、一通り拝むど、木魚たであで、

「ナムクラタンノトラヤヤ…」

て唱えだど。ほうすつど、雲あだんだん晴れできて、ほの雲の中がら、棺箱あ

すうつと下りて来て、何事もねあがつたように明るくなたけど。

ほんでは、皆たまげでしまて、見だごあ汚ねあこじぎ坊主みであんた格好こそしてんども、よっぽど修業つんだ、徳の高あ坊さんなんだなど思たけど。

ほんで、ほの坊さんは都がら偉い位もらて、庄屋にすっかり立派にしてもらたお寺さ入て、ほのお寺の住職になたけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 中川チャウ)

15 古屋のもり

むがしあつたけど。

ある山ん中に家あつてなあ、ほごにあ爺さまど、わらすこあいだけど。わらすこあ、夜んまなつど、いづでも爺さまに、むがし語てもらていんなだけど。

ある雨の降る暗あ晩、囲炉裏の傍で、わらすこあ爺さまどさ、

「爺さま爺さま。この世の中で、一番恐ねあおのあ何だおんだべ」

て聞だど。ほしたば爺さまあ、

「んだなあ。恐ねあおのあさままいんども、こげあた雨の降つづぎあ、ないんたて、古屋の漏りあ一番おかねあべなあ」

ていうけど。ほんで、わらすこあ、

「古屋のもりてほんげあえ恐ねあおのがあ」て言^ゆたば、爺さまあ、

「んだんだ。古屋のもりづあ、泥棒ゆが恐ねあおんだ」

ていうけど。ほしたば、わらすこあ、

「ほう。ほんげあえ恐ねあおのが。んであ、狼ゆが恐ねあおのが」て聞だば、

「んだんだ。狼なのゆが、ずっと恐ねあおんだ」つけど。

ほん時、狼あ山がら出はて来て、ほごの家^えの馬こ食いであくて、馬屋の傍さかぐつで、爺さままだ寝んな待ちつだがつたど。ほうして、ほの話聞っただけど。

ほうして、狼あ、

「ほう。人^{しと}だて、他の生物^{いぎおん}だて、皆俺あどご一番恐ねあていうども、この世の中

にあ俺より恐ねあおのあいんなが。なんだおんだべ、恐ねあごど」

ど思^もていただけど。

ほれがら、ほこの家にあええ馬こあいだていうなで、馬泥棒も馬こ盗みだくて、裏の口の軒端^{ぐちば}さ来て、ほの話聞^{きこ}つだど。ほうして、馬泥棒も、

「ふうん。狼ゆが恐ねあなが、古屋のもりずおのあ、ほんげあえ恐ねあごつたら、うっかりしてらんねあな」

ていだけど。ほのうづん、爺さまあ、

「今夜こんげあえ雨あ降てきたおん、そろそろ古屋のもりあ来んぞ。ああ恐ねあごつた」

ていうけど。ほしたば、ほれ聞^{きこ}つた狼あ、

「ほんげあえ恐ねあえおのあ、そろそろ来んながは。んであ、俺あこげあえしてらんねあ。捕^{しめ}らえつどえぐねあ、逃げねあんねあ」

て、びぐびぐしつたけどは。馬泥棒も、ほれ聞^{きこ}で、おかねあおんだと思^もて、びぐびぐしつたけどは。

ほうしてゐるうづん、爺さまあ、大つき声で、

「ほらきたつ」

て言^ゆたば、狼あどでしてしまて、あわくて裏の口の方さ、どんどど逃げだど。

ほしたば裏の口にいだ馬泥棒あ、黒えおのあ走して来たはげあえ、馬こあ、古屋のもりあ来たはげあえ、恐れあくて逃げで来たど思て、捕るかんじよで、狼の首さ抱^{たく}づえだど。んでも、はつつおえおんで、首たまさ抱^{たく}づえだば、引張らつでしまて、狼の背^{へなか}中さのへらつで、しまたけどは。

ほうすつど、狼あどでして、古屋のもりにのらつだど思^もて、恐れあくて恐れあくて、乱気んなて山さ走して行^えて、一晚山うづ走してありたど。

ほうしてゐるうづん、狼あくたびつで止またど。ほしたば、ばえんと自分前^{おわめあえ}さ、人あ落ちできたけど。ほうすつど狼あ、

「なんだ。古屋のもりだど思て、恐れあくていだば、人だてあ。これあありがであ。

早速ごつつおなんべ」

ていうなで、馬泥棒あ、たあだ狼に食つでしまたけどは。とんぴん からんこあ

ねあつけどは。

(話者 高橋久米次郎)

16 胡瓜姫こ

むがしあつたけど。

あるどさなー、爺さまど婆さまいであえつたど。何時でも畑さ行たり、田さ行たり、山さなの行たりしていただけど。

ある時なー、婆さま、下の川さ洗濯しん行たど。ほうしたら、向うがら何が流つできたけど。ほんでなー。婆さま、

「あら、何が流つできたじゅ」て見つたど。

ほうしたば、大つき胡瓜あ**しと**一づ流つできたあだけど。婆さま、

「なんだて大つき胡瓜だごど」て、ほの胡瓜拾たど。ほうしてなー、ほれ、

「大つき胡瓜だおん、爺さまど二人して食うべ」

て、家さ持てきて、水屋みじやさ置えつたど。

ほうして、暫ぐ洗濯物おもでさ掛けたり、表の草むしりなのしつたど。ほうしたば、家えん中で、「おぎやあ、おぎやあ」て、赤子あかこの泣ぐ声あすつずおん。婆さまどでしてしまたけど。

「俺あ家にあ、赤子なのいねあな、ないなおんだべ」

ど思おもてふしぎがたど。あんまりふしぎだおんださげあえ、耳のせだべがどもて、まだ、だまつて聞つたど。ほうしたば、まだ、「おぎやあ、おぎやあ」て泣ぐ音あすつずおん。ほんで婆さま家えん中さ入ゑてえて見だど。ほしたば、泣なぎ声あ水屋がらだけど。ほんで水屋さ行てみだば、めんごげだ女おおなこぼこあ泣なつたなだけど。ほして、胡瓜しつたあ二ふたつん割つて、胡瓜がら生んつできたなだけどや。婆さまあ、「なえだて、胡瓜がら生つできたあだじゆは。まずめんごえごど、めんごえごど」て、ほの赤子抱であえできて、自分着物おわきのさくるで、寝へでおえつたど。ほうしているうづん、爺さま昼あがりして来たけど。ほんで婆さまあ、

「爺さま爺さま、まず、見どころ。胡瓜あ川さ流つできたはげあえ、拾てきて、水屋さ置えつだば、ほの胡瓜がら、こげあえためんこえ赤子おぼこあ生んまつできたじゅ。」

て、ほの赤子おぼこ、爺さまどさ見めへだど。ほしたば爺さまも、どでして、

「なえだてめんこえ赤子だこど。胡瓜がら生つだなて、おがしごどもあるおんだ」
て、びつくりしつたけどは。ほうして、

「俺わらだ子供しだち達あいねあはげあえ、神さま授げでくつだなだべ。んでもえがった、えがった」

て、二人してうんと喜よろこで、胡瓜がら生つだはげあえ、胡瓜姫こどもつけんべで、名前胡瓜姫こどつけただけど。ほうして、早ぐ大つきぐなれ、早ぐ大つきぐなれて、二人あ大事んして育でつただけど。

ほうして、大つきぐなつど、婆ばあさまあ、

「胡瓜姫こあ女だはげあえ、機織りでも教へねあんねあ」
ていうなで、胡瓜姫こあどき、機織り教へつだど。

ほうして暮しているうづん、胡瓜姫こも機織上手なて、何時でも、きつこんぱたん、きつこんぱたんて、ええ音さへで、織つてだけど。

ある時、婆さまあ、

「今日あ、俺も爺さまも山さ行くつさげあえ、一人で留守居してろよ。ほうしてな、山がら天の邪鬼あ来てさらわれつさげあえ、決して戸開げんなよ。なんたごどああつても、ほつても開げであ駄目だぞ」

て、丁寧ぐ教へで、爺さまど婆さまあ山さ行たけど。

ほうしてなあ、一寸すつど、

「胡瓜姫こ、胡瓜姫こ。いだがや」

ていう声あすつずおん。ほんで胡瓜姫こあ、「いだい。誰だや」て聞だば、

「天の邪鬼だ。あんまり天気あええさげあえ遊びん来た。戸開げろや」

ていうけずおん。胡瓜姫こあ、

「戸なの開げらんねあ」

て言たば、天の邪鬼あ、

「まず、ええ天気だ、こんげあえええ天気あ、めったんねあはげあえ、機織あすなの何時あすでも出来るんだ。外さ俺ど遊びあすん行こや」

つけど。ほんでも胡瓜姫こあ、

「おら嫌やだ。戸開げつど、爺さまど婆さまに、怒こしやがえるおん」
て言ゆたど。ほしたば、天の邪鬼あ、

「遊びん行たたて、誰も怒いしやぐおんでねあんだはげあえ。長者野さ、うんと美味桃んめあえあえつぺあなてだぜあえ。ほごさ連つで行くはげあえ、戸開あげろちや」

て、天の邪鬼あ、言ゆたら、胡瓜姫こあ、

「嫌やんだ。戸開げつど怒こしやがえるおん」
て聞がねあけど。ほしたば天の邪鬼あ、

「んだら、俺あ入らねあはげあえ、指二本入へあえるくれあえすがしてみろ」

なて、あんまりいうおんだはげあえ、胡瓜姫こあ、戸の心張棒つっぱりとて、少す開げだど。ほうすつど天の邪鬼あ、戸の隙間こさ爪引つつ掛て、がえら開げでしまたけど。胡瓜姫こなの戸しめつだて、天の邪鬼あ力あるんだおん。胡瓜姫こなのかな

わねあんだはげあえ。ほんで、天の邪鬼に機屋さ入ら^へつでしまたけどは。んだおんだはげあえ、胡瓜姫こあ、ほごさ、すぐだましてまたけどは。なんぼがどでしたあだべ。

ほうすつど、天の邪鬼あ、胡瓜姫こあ嫌^やだて泣ぐなかまわねあで、胡瓜姫こどご背負^{んぶ}て、長者野さ連^つで行^えたど。ほうして、ほごの桃のあつどさ、胡瓜姫こあどごどつさり下ろして、自分桃の木さ上^うがて、一生懸命ん桃食いだけど。

胡瓜姫こあ、

「俺あどさも食へろ」

て言^ゆたば、青え桃ばりぶんなげでよごして、おわばり赤げあえんめ桃食うなだけど。ほんで、胡瓜姫こあ、

「青え桃なの食^かねあべちや。うめあえどご落^んしてよごへ」

て言^いたば、天の邪鬼あ、「これがつ^かていうど、青くて固^{かた}な、胡瓜姫こあ頭^{かぶ}さ、ばえんばえんど、ぶつけでよごして、胡瓜姫こあどご、殺^{ころ}してしまたけどは。

ほうして、知らねあふりして、胡瓜姫こ^{ばげ}ん化で、何時でも胡瓜姫こあ機織^はして

る小屋さ入て、ぎこら、ばだら、ぎこら、ばだらど機織しつたど。

ほごさ、爺さまど婆さまあ帰^けえてきたけど。ほうして、婆さまあ、爺さまどさ、
「なえだて、今日の機織の音あ、めつぼう下手だ音だな。爺さま。胡瓜姫こあ、
どごがえぐねあべが」

て、ふしぎがて、小屋んどさ行^えて、

「胡瓜姫こ、胡瓜姫こ。今帰えてきた。お前、どごが悪りが、めつぼう今日あ機
織下手だ音さへるちやな」

て言^ゆたば、小屋ん中で、天邪鬼あ、

「どごも、えぐねあぐなのねあ」

て言^ゆいながら、ぎこら、ばたら、ぎこら、ばだらて、下手だ音さへつずおん。

あんまりふしぎだおんださげあえ、入口の戸開げで見だど。んだて、見れば胡瓜
姫こだべ。おがしおんだど思^もて見^みつだば、やつぱり、ぎこら、ばたら、ぎこら、
ばだらど織^おつてゐるずおん。

ほうしつたどさ、鳥こあ飛^とできて、

胡瓜姫こあ さらわらった

胡瓜姫こあ さらわらった

て、さえずつけど。爺さまど婆さまあ、はつと思て、これあ胡瓜姫こんねあ、
天の邪鬼だて分て、爺さまあ、

「この畜生あ、胡瓜姫こあどご殺したな」

ていうど、ほごにある棒で、天邪鬼あどご、だぎだぎと叩えで殺したど。むぞ
せあえ話よな。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋久雄)

17 胡瓜姫こ

むがしあつたけど。

むがしあるどき、爺ど婆んばいだけど。ほうしてな、ある時、爺あ山さ木伐

りん行たど。婆んば、川さ洗濯^{へんたくえ}行たど。婆んば川で洗濯^{かみ}したば、上^{かみ}の方がら、大つき胡瓜あ流つできたけど。婆んば、どでして、

「なんだて大つき胡瓜だごど。なんぼが美味^{んめあえ}んだが」

て、ほの胡瓜、家^えさ持てきて、

「爺あ、この暑^{あつづき}時、山さ行たあだはげあえ、なんぼがのどあ乾^{かわ}えだて来んべあ。この胡瓜食^かへだら喜^{よろこ}ぶべな」

て、爺あ来んな待^{まち}つたど。ほのうづん、爺あ、

「あー、暑^{あつ}々。今日あ、めつぼう暑^{あつひ}日だ」

て、大汗かあえで来たけど。ほんで婆んばあ、

「まずまず、なんぼが暑がったんだがな、爺。この胡瓜食^かへんべど思^{おも}て待^{まち}つたて、ほの大つき胡瓜見^めへだど。ほしたば爺あたまげで、

「なえだや、ぜえぶん大つき胡瓜だおんだな。こんげあえ大つき胡瓜見だごどあねあ、どこが持てきたおんだや」

て聞^きくけど。ほんで婆さまあ、

へんたぐえ

んめあえ

「川さ洗濯行たば、上の方がら流つできたあだけ。あんまり美味そだし、爺あ、のどかわあえだて来んべはげあえ、二人して、食うべど思て、とてだあだ」

はや

も

ほじよ

て、婆んば、ほの胡瓜、まねあ板さあげで、切すべど思て、包丁当でだば、まだ切さねあうづん胡瓜あ真中がら割つで女おぼこあ、

「おほげあえ、おほげあえ」

んま

て、生つできたけど。爺ど婆んばどでして、どでして、腰拔がすどごであえつたけど。

んでも、爺ど婆んばどさ、子供いねあべ、ほれさめんごげだ赤子おぼごだべ。んだおんだはげあえ、爺ど婆んば喜で、

よろこ

「神さま、俺だおぼごあいねあえおんだはげあえ、授げでくつだあだべ」
て、二人あうんと喜だけど。

「なー爺、おぼこ授げでもらてえがつたな。なえて名前つけだらえがべ」
て、爺ど相談したば、爺あ、

「んだなー。んであ胡瓜がら生つだあだはげあえ、胡瓜姫こども付けっが」

て言^ゆたば、婆^ばんば、

「んだな爺、ほれあええ名前だ。ほれあえ、ほれあえ」

て、二人あ、ほの赤子さ、胡瓜姫こど名前^{であえす}つけで、大事^{であえす}んして育でだけど。

ほうしてなー。ほれがら胡瓜姫こあ、だんだん大つきぐなて、十二、三にもなつど、婆^ばんば、胡瓜姫こあどさ、機織^{つばり}教へだど。始めのうづあ下手で、ぎごら、ばだら、どーん。ぎごら、ばだら、どーんて、音までえぐねあがったども、十五、六なたば上手んなて、毎日機織^{つばり}小屋で、きっこ、ぱったん、とーん。きっこ、ぱったん、とーんて、機織^{つばり}してんなだけど。

ある時^{とき}、爺^{おや}ど婆^ばんば、山の畑^{はたけ}さ仕事しん行^えぐごどんなて、胡瓜姫こあどご小屋さ置^おえで出^でがげだけど。ほうして、出^でがげしめあえん、胡瓜姫こあどさ、

「胡瓜姫こ、胡瓜姫こ。機織^{つばり}小屋さ心張^{こころは}棒^{ぼう}かておえで、誰あ来た^きたて決^きして開^ひげんなよ。誰^{たれ}が何^{なに}が言^いたら、爺^{おや}ど婆^ばんばになんぼしたて開^ひげんなて言^いわっただはげあえ、開^ひげらんねあなだて言^いえ」

て、何^{なん}べんも言^いて、山^{やま}さ行^いたけど。

ほうしてなー、暫ぐすつど、ほの小屋さ猿あ来たけど。ほうして、

「胡瓜姫こ、胡瓜姫こ。今日あええ天気だはげあえ、長者野さ桃食いん行がねあが。丁度食いあんべだべし、遊びながら行くべや」

ていうけど。んでも胡瓜姫こあ、

「機織しねあんねあさげあえ、行がんねあ」

て言たど。ほしたば猿あ、

「機織なの何時でも出来んべや。まず、この戸開げでみろちや」

つけど。ほんで胡瓜姫こあ、

「んだて、俺あ家の爺さまど婆さまあ、誰あ来たて、ここ開げんて言てえたはげあえ、開げらんねあ」て言たど。ほしたば猿あ、

「ほんたご言わねあで、こんげあえええ天気だおんだおん、遊びん行てみろちや。まず、この戸開げでみろや」

ていうけど。んでも胡瓜姫こあ、

「んだて、開げんて言わったあだはげあえ、開げらんねあ」

て言たど。ほしたば猿あ、

「ほんだごと言わねあで、まず、早く開げろ。折角、遊山さもてきた小豆餅あ、落んぜあは」

ていうけど。ほんで胡瓜姫こあ、急いで戸開げでまたけどは。猿に嘘こがつだあだど。

ほうすつど、猿あ、わらわらと入て来て、胡瓜姫こあ嫌だ嫌だていうな、背負て、長者野さ連で行て、桃ぬ木んどさ下ろしたけど。ほうして、猿あ桃ぬ木さ上がて行て、自分ばりんめあえ桃食てんなだけど。ほんで胡瓜姫こあ、

「自分ばり食ねで、俺あどさも一つ食へろや」て言たば、「ほれっ」ていうど、青くて固あえ桃ばり、胡瓜姫こあどき投げでよごしたけど。ほんで胡瓜姫こあ、

「こんな青え桃なの固あえくて食んねあ。もといめあえなよごへ」
て言たば、猿あ怒で、

「これでも食んだ」

ていうど、固あえ青え桃、胡瓜姫こあどき、ばえんばえんど投らでよごしたけ

ど。ほの桃あ、胡瓜姫こあ頭やら体中さ当たべ、固あえ桃なおんだおん、ほんで胡瓜姫こあ死でしまたけどは。

ほうすつど猿あ、桃ぬ木がら下りて来て、胡瓜姫こあ顔つらの皮剥がして、ほれ自分おわかふて、胡瓜姫こあ着物きて、胡瓜姫こん化げだけど。

ほうして知らねあふりして、機屋えさ行て、ぎごら、ばだら、どーん。ぎごら、ばだら、どーんて機織りしったけど。

ほうしているうづん、爺ど婆んば、夜あがりして来たけど。ほうして、猿あ機織る音聞で、二人あ、なえだて今日の胡瓜姫こあ、めつぽう機織、下手だおんだて話しったけど。ほれで婆んば、

「胡瓜姫こ胡瓜姫こ。今日あ、めつぽう機織下手だおんだ。どごがえぐねあなが」て聞だど。ほしたば、猿の化げだ胡瓜姫こあ、

「どごもえぐねあぐねあ」

ていうずおん。ほうして、まだ、ぎごら、ばだら、どーん。ぎごら、ばだら、どーんて、まずまず下手だ音さへっずおん。ほんで二人したりあ入へて見だど。ほしたば

胡瓜姫ごあ顔しんべし、着物も胡瓜姫こあ何時も着てる着物きてんだし、変りあねあども、ないしたて下手だ機織するおんだはげあえ、なんだが何時もど、どこがちがうど思て見っだど。ほうしていたば、ほこの窓んどさ、鳥こあきて、

胡瓜姫こあのつた車がら

ただ 猿に 落さつた

胡瓜姫こあのつた車がら

ただ 猿に 落さつた

て、せあえづつけど。爺ど婆んばあ、ほれではつとかんづえで、爺あ、

「猿つ、この畜生あ、胡瓜姫こん化げあがたなつ」

ていうど、猿どごかすかみづげで、棒で、ひばだぎづげで、顔の皮ひん剥え

だど。ほうすつど猿あ顔出はてきたべ、爺あ怒あで、

「胡瓜姫こあどごどさやた。このえぐなし畜生あ、胡瓜姫こあどごどさやた」

て、猿あどごばえんばえん、ひばだぎづげだば、猿あ、

「長者野さ連でえて、ほごさぶん投げできた」

て白状したけど。ほうすつど爺^{おや}と婆^{ばあ}んばあ、怒^こあで怒^こあで、猿^{さる}あどごありつたげしはだきづげで、殺^{ころ}してしまたけどは。

ほうして、猿^{さる}あどご萱^あ野^のさ引^ひぎつて行^いて、ぶん投^なげできたけど。血^ちだらけの猿^{さる}あどご、萱^あ野^の引^ひぎつて歩^ありたべ。んだはげあえ萱^あの根^ね元^{もと}あ今^{いま}でも赤^{あか}げあえあだど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 舟生カネヨ)

18 なんげあえ話

むがしあつたけど。

むかしあるどさなあ、鼻^{はな}の下^{した}の長^{なが}げあえ男^{おとこ}あいであつたど。ほの男^{おとこ}人^{ひと}あ、ある時^{とき}、長^{なが}げあえ鼻^{はな}の下^{した}、又^{また}長^{なが}げあえぐして、空^{そら}見^みつただけど。ほうして、

「あらつ、空^{そら}がらふんどすあ下^{した}がて来^きた」て見^みつただけど。

ほのふんどすあ、長げあえおんで長げあえおんで、今日もふわふわ、明日もふわふわ、明後日もふわふわ。十日もふわふわ、百日もふわふわ、一年もふわふわ、二年もふわふわ、三年もふわふわ、四年もふわふわ、五年もふわふわ、ふわふわ、まだ、ふわふわ、ああ長げあえ長げあえ。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋良雄)

19 昔話の諺

昼間から昔語つど、鼠に小便しよべしかげられるていうおんだ。んだはげあえ、むがしあ昼間語らんねあなよな。

20 名刀蛇切丸由来（伝説）

山形県の最北端、真室川町字新及位のぞきに高橋作右エ門という家がある。ここに現在、蛇切丸じやきりという名刀があり、その名刀にまつわる伝説が三つ残っている。その一つは次のような話である。

現在の高橋作右エ門氏より八代前に、やはり作右エ門という人がいた。その人は文武に秀いでた人で、山深い及位におつては、よい修行が出来ない、なんとしても諸国を廻り、その道の達人に会つて、教えを請わなければというので、家を出て、諸国の賢人、達人を求めて修行を重さね、三年後に帰国の途についた。

帰路は秋田県の本荘から、山また山の鳥海山麓矢島に行き、更に次年子じねごを越え、こしき峠を越えて帰ることにした。

山道を歩き続け、やがてこしき峠にさしかかったが、このこしき峠の北側で、秋田県側の峠近くに「びつき沼」という沼があるが、そのびつき沼まで来て、疲れたので、沼のそばの石に腰を下ろして休んだ。

よつぽど疲れておったのだろう。それに陽気もよかったので、石に腰を下ろすと、ついうとうと、うたた寝をしてしまった。

どれ程寝たか分らなかつたが、ぱちつという刀を鞘に納める音がしたので、はつと目を醒まして、思わず腰の刀に手をやった。しかし、異状はなかつた。

これはおかしい、誰か来て俺の剣の腕を試すつもりで、刀の鏗音をさせたのか、とあやしみ、あたりを見まわしたが、誰もいない。これはどうしたことだろうと沼の方を見て、あつと思わず驚きの声をあげた。あれ程澄んで、美しい水をたたえていた沼が、真赤に染り、しかも大蛇の体が三つにも四つにも切られて、浮いているではないか。余りの不思議さに、作右エ門は呆然とそれを見ていた。

やがて作右エ門は我にかえつて、自分の刀の鏗音がしたのだつたと思ひ出して、刀を抜いて見た。ところが驚いたことに、その刀に、まだ真新しい血糊がべつとり着いているではないか。

どうしたのだらうと、その刀を手にとって大蛇の死骸を見た。そして、これは誠に不思議な事であるが、この刀が独りで抜け出して、この大蛇を切つたとしたか

考えようがないと思った。

これは、この大蛇が、きつと俺をひと飲みにしようとして来たので、この刀がそれを見て、鞘から独りで抜け出し、この大蛇を退治して、俺を救ってくれたに相違ないと思った。

ああ、なんという神刀であろう。刀が人の難儀を救ってくれるなんて。本当に有難い刀だ。大蛇を切った刀だから、蛇切丸じやきりと名づけ、それからはその刀を神として、大切に祀ったそうだ。今でも高橋家では年に一回、供物を供えてお祭りをしてる。

もう一つは、こういう伝説である。

及位の国道十三号線の秋田県境に、雄勝峠という峠がある。昔は山越えの難所であった。

この峠に、何時の頃からか分らないが、雄勝太郎という盗賊が棲家をかまえ、山形、秋田両県の豪族や大金持に押入り、盗みを働いていた。

しかし、一般の農民にはなんらの危害も加えなかった。そればかりでなく、飢

饑で百姓が困っていたり、ろくに働き手がなく、生活に困っている人達には、金をめぐんで、助けてさえやったので、そこの百姓達からは、神さまのように有難がられていた。

ところがその西側で、二里ばかり離れた所に、こしき山という高い山があるが、その山麓のこしき峠の近くには、蛇切丸という盗賊が棲んでいた。その蛇切丸という盗賊はひどい強欲な盗賊で、家来を連れては諸々を荒し廻り、悪業の限りを働いていた。

そして、雄勝太郎の縄張りまで荒し廻るので、時々小ぜりあいをしていたが、遂にたまりかねた雄勝太郎は、ある月夜の晩、家来を連れて蛇切丸の棲家になぐりこみをかけ、蛇切丸を討ちとった。蛇切丸の家来達は、あるいは討たれ、あるいは逃げたので、雄勝太郎は蛇切丸の棲家に火をかけ、棲めなくしてしまった。その時、蛇切丸の持っていた刀は、あれ程戦ったのに、刃こぼれ一つなく、すばらしい刀であったので、雄勝太郎は、これは名刀に違いないと、その刀を持ち帰った。そして蛇切丸と名づけて大切に所持していた。

その蛇切丸の名刀がその後どういふ経緯で高橋家のものになったかは分らないが、代々高橋家の家宝として残っている。

さらに、この蛇切丸にはもう一つの伝話がある。

雄勝峠には、何時の頃からか分らないが、雄勝太郎という山賊が棲んでいた。

この山賊は義侠心のある男で、弱い者いじめはしないし、そればかりか百姓を助け、自分がこの難所におれば、他の盗賊の棲家にならず、通行人も悪い奴等にいじめられることがないだろうとがんばっていた。

だからそこを通る者から、幾らかの金を貰うこと位ならいいだろうと、僅かの金をもらっていたそうだ。だから村の人には信望があり、頼りにもされていた。

ところが、その峠の南側一里ばかりの所に、塩根川という村があり、その村の奥に、がんどう森という山があるが、そのがんどう森に、もと雄勝太郎の家来でよくないことばかりし、自分のふところばかりこやしていたので、追い出されてしまった蛇切丸という盗賊が棲むようになった。そして、百姓をいじめたり、人の家に押し入っては人を殺し、さまざまな悪業を働いていたということである。

それを聞いた雄勝太郎は、これを黙って見過ごしてはおけないと、家来をつれて、ある晩、がんばり森の蛇切丸の棲家に押しかけ、蛇切丸を伐り殺した。驚いた蛇切丸の家来達は、ちりぢりに逃げ失せてしまった。

その時蛇切丸の持っていた刀が、今高橋家に伝わり、蛇切丸と名づけられ、家宝になったということである。

21 主寝坂縁起（伝説）

何時頃のことなのか定かでないが、昔、矢島（秋田県由利郡）の城が敵に攻められ、最後の落城も知れぬ状況になったので、殿さまは姫君を京の縁故の者を頼って行くように、心ききたる若者の家来を従者につけ、逃がしてやった。

姫君は若者に連れられ、矢島から砂子（まなご同郡）を通り、甕峠を越して及位に至り、主寝坂を越えようとした。しかし、足の弱い姫君は、馴れぬ山坂道に、足に

まめを作り、主寝坂にさしかかった時は歩行も思うにまかせない有様であつた。

見かねた従者は、姫君に背を向けて、

「私に負われて下され」といった。

しかし、若い姫君は若者に負われるのを恥らつて、初めは辞退したが、若者に再三にわたつて、

「負われて下され」という申し出に、足の痛さをこらえていたので、遂に若者に背負われて峠にさしかかった。

この時は、最早陽も山陰に沈み、道もたどたどしくなつて来たので、この峠で夕餉の仕度もし、飯の宿をも作ろうと、姫君をおろし、種々仕度を調べ、夕餉もすまし、あたりが暗くなつたので、若者は姫君を飯屋に横たえ、自分は少し離れた所に休もうとしたが、山中の事なれば、姫君は闇の恐さに、若者を側から離そうとしなかつた。

若者にしてみれば、主家の姫君の事なので、身分のちがいを思い、別の場所に休むと再三申し出たが、姫君がどうしても離さないの、致し方なく姫君と並び、

姫君に背を向けて横になった。

若者は昼の疲れに、そのまま、まどろんでしまった。そのうちに何となく胸苦しくなつて目を醒ました。ところが、姫君の手が若者の胸に置いてあつたので、若者はその手をそつと除けようとした。ところが姫君はその手に力を入れ、除けられまいとした。慌てた若者は起き上がろうとした。姫君は若者に起きられまいと、かえつて若者におおいかぶさつてきた。仕方なく若者はまた横になった。

その姫君は若者の耳に口を寄せて、恥かしそうに、「女にして下され」というではないか。若者は驚いてしまった。身分違いの姫君から、そんな言葉を聞こうなどとは、夢にも思つていなかったばかりでなく、姫君を守つて立派に京に届けるのが、自分の役目である事を固く信じていたので、これはいけないと、かたくなに考え、姫君の体を押し除けようとしたら、姫君に泣かれてしまい、どうしたらよいか迷つてしまった。

姫君は益々すがりついて来るし、若者でもあり、そんなに言われ、すがりつかれると、心より体がはやつてくる。ましてここは人目のない所。若者は律儀者で

あつたので、このままでは恐れ多いと考え、自分が根元を枕にしている朴の葉をとり、その葉に穴を開け、その穴に自分のものを差し入れ、姫君の肌に直接触れないようにして、姫君を女にしてやった。

この峠には、それまで名がなかったのだが、それから、誰言うとなしに、主人が寝た坂であり峠だからと、主寝坂峠と呼ぶようになったそうだ。

さらにこの事のあつた後からは、この峠の付近の朴の葉は、虫も喰わないのに、みんな穴があくようになったが、これは若者のあけた穴だと、今でも村人に信じられている。

あとがき

高橋良雄

『及位の昔話』、武田先生の御厚意に依り、特集号として、皆さまに読んで頂けた事を、何よりも嬉しく思っております。

武田先生には、種々御多忙で、寸暇も惜しい御体であつた事と思いますが、その中で、ガリ板を切り、校正に当り、発送の事までなされておられる御精力には、唯々驚きの他ありません。

特に私のように、文章を知らない者の書いた文の、句読点、送り仮名その他、校正には御苦労なされた事と思いますが、それを御懇切に訂正して下さい、なんとか皆さまに読んで頂ける文にして下さる等、今この昔話を終るに当り、その御苦労と御厚意を心から感謝致します。

『及位の昔話』は、真室川町大字及位からだけ集めたものですが、その数僅か

六十五話しか収集出来なかった事は、非常に残念でした。在職中から集めたいとは思っておりましたが、果せず、昭和五十二年春からの収集で、各部落を廻って見て、既に十年遅かった、いや二十年も遅かった感がありました。

この昔話を書くに当り、最も苦労したのは、方言を文字に現わす事です。例えば、“されない”という言葉は“しえねあ”と書いたのですが、果して、読んで下さった方に意味が通じたかどうか、この他にも沢山あり、苦労した点です。

また、及位だけにしか伝わっていない昔話というのは僅か十五話に過ぎず、他地方に比べ淋しい限りです。今後、出来れば、真室川の昔話として、真室川全域から採集して、本誌（山形の民話）に載せて頂きたいものと思っております、また、「及位の昔話」に出て来る方言については、難解のものもあったのではないかと思います、現在、及位の方言集を収録中なので、完成後、若し機会がありましたら、本誌に載せて頂きたいと思っております。

「及位の昔話」
ガリ版を終えて

武田 正

高橋さんに「及位の昔話」をお願いしたのは、「山形の民話」への執筆のつもりでしたが、送られて来た原稿は百枚ほどのもので、全部で六冊、五百枚を越すものでした。聞きとりの正確さ、方言表記の工夫など、その地に育った方でなければ出来ない配慮が全て行なわれている上に、高橋さん自身が語り手であることは、最もすばらしいことでした。最上地方にはすでに、国学院大の野村純一氏夫妻による調査研究、大友義助氏の『新庄のむかしばなし』、そして故佐藤義則氏の仕事。そして柳田国男先生に協力して戦前に調査に当たった鮭延瑞鳳氏のような輝かしい業績が見られるが、今ここに、高橋さんによつて、確実なものになって来たと言える。私がガリ版にしたいと申し出たのは、この大冊が、なるべく早く研究者や他の調査者の手に届き、研究の資料として役に立つてもらいたかったからである

が、出来上がってみれば、真室川町だけでなしに、県の文化遺産として活字にして残さねばならないものであることを、改めて知らされたと言つてよい。本当の調査は、その地で生まれ、育った人であるべきだとは民俗学を創つた柳田先生の言葉であるが、この「及位の昔話」はその意味でも第一級の資料であり、それをガリ版にさせてもらったのは大変うれしいことであつた。約半年、ガリ版にかかりきりであつたが、終了して、一つの義務を果たした安堵感がある。

今後高橋さんの調査研究が全域にひろがるのを期待し、深くお礼申し上げます。次第である。

昭和五十六年二月十日

及位の昔話（五）

話著者 高橋良雄

編 武田正

山形民話の会

山形県南陽市赤湯三一八〇の四

昭和五十六年二月十五日 発行

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年十月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四